
Omit

伽月るーこ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

O m i t

【Nコード】

N 4 5 7 0 T

【作者名】

伽月るーこ

【あらすじ】

孤独を抱える少女に訪れたのは、異世界への誘い。『二つの月』と『二つの塔』。分かち合った力は均衡を崩していた。祖母の歌声に導かれるまま、少女は自ずと己の“運命”をも選択していくこととなる。

prologue

「おばあちゃんは、まほうつかいなの？」

海に見える縁側で、隣に座った少女が言う。

ふつくらとした桜色の頬、すくと落ちた漆黒の髪は艶やかで陽の光を受け光沢を放っている。愛らしい笑顔と歳の割には甘えた声を出してくる孫を見つめながら、ミナは目を丸くした。

特別何をした、というわけではない。

いつものように孫娘から祖国の歌を強請られたので、聞かせただけだ。

すると、少女はまるで「私だけがおばあちゃん秘密を知っているのよ」と言わんばかりに勝手な推理を始めた。

「だってね？ おばあちゃんの髪の毛が本当は銀色なのも、おばあちゃんが歌を歌うときだけ不思議な世界が視えるのも、みんな知らないのよ？」

そう言ってくすくす、と笑う少女にミナは驚きを隠せなかった。

自分の正体を、血を分けた娘にさえ明かしてないミナにしてみれば大変な驚きである。

「…どんな世界か、聞いても良い？」

この発言には、少女も想定外だったのかきよとした顔をしてミナを見つめていた。

「…信じてくれる、の…？」

「叶流は私に嘘をつくような子じゃないよ」

ミナからの言葉に満面の笑みを零した少女は、嬉しそうに自分が「視えた」世界の話を話し始めた。

「あのね、必ず視えるのは二つの塔と大きな月と腰まで長い銀色の髪をした二人の女の人。…その人たちが塔の上で…、向かい合わせに祈ってるの」

ミナの脳裏に浮かぶ「かつて」の記憶。

それが孫娘の言葉でまざまざと浮かび上がってくる。

かつて自分が棄ててきた「国」のことを。

「まるで、…月に祈りを捧げているようだった…」

孫娘からの言葉で郷愁に思いを馳せていた意識を戻すと、ミナは自分を見つめる愛らしい少女に向かって瞳を細める。

「…叶流は、いくつになったの…？」

「え？ 15だよ」

不思議そうに首を傾げた孫娘を見て、ミナは寄る年波を実感していた。

目を閉じて浮かべる故国。走馬灯のように流れていく自分の人生が、瞼の裏に駆け巡る。

「おばあちゃん…？」

不安げな声を聞いた。

思考の海に落ちる寸前に引き上げられると、ミナは不安げに自分を見上げる少女に「覚悟」を固めた。

「…叶流…？」

「…なあに…？」

不安げに揺れている瞳にこれから自分がすることは、きっと残酷なことだろう。

それを理解した上で、ミナは自分の「未来」を決めた。

「…おばあちゃんのふるさとはね、16歳になったら一人前と認められるの」

「…うん」

「だからね。前祝を、あげる」

「前祝…？」

未だ不安が拭えない少女の顔を見つめながら、ミナは胸元に下げているペンダントを外した。

そして。

「これ」

滑らかな肌をしている少女の両掌の上に乗せて、そつと彼女の両手ごと自分の皺だらけの手で包み込むように握りこませる。

少女は驚きに目を見開き、弾けるようにミナを見つめた。

「…良いんだよ。叶流が持つてる方が良い」

「で、でも、これ…!!」

「そう。大事な大事なお守り」

「だったら私…!!」

「だからこそ、叶流に持つてもらいたいのだ。…前祝だと言ったでしょう?」

少女は一抹の不安を覚えていた。

まるで形見分けのように手渡されたペンダントの温もりに、寂しさが滲んでいるように感じたからだ。

「…いい、いらない…。私、いらないっ!!」

瞳に涙をいっぱい浮かべた少女に、思わず苦笑が漏れた。

勘の良いこの子のことだ、きつと何かしら感じ取ってしまったんだらう。

それでも、ミナは少女の手を離すことはしなかった。

「…いやだ…、いやだよ…。ねえ、おばあちゃん、どこにもいかないでしょ?…? ま、まだ私の…、私の傍にいてくれる、で、しよう?…」

ぼろぼろと零れる涙が、大粒の玉になってふわふわのスカートに落ちて染みになる。

その染みは落ちる涙でどんどん大きくなり、ミナの心を痛めた。

「……」

少女を一人遺すということが、どういうことに繋がるか解っていた。

けれど、ミナにとってももう後がない。

「…いや、…いやだ…。一人に、しない、で…。…おいてかないで…」

「置いていかないよ。おばあちゃんは、ずっと叶流と共にある。だから、これを受け取っておくれ？」

そう言って、少女の額に自分の額をコツンと当てた。

涙がぼろぼろと流れてひきつけを起こしそうな孫娘に向かって、諭すように歌うようにゆっくりと言葉を紡いだ。

「お前は早くに両親を亡くして、一人でも必死になってここまで生きてくれた」

「…お、ばあちゃ…、い、て…」

「そうだね。叶流には私がいた。私にも、叶流がいた。…だから、おばあちゃんはとても幸せだったよ」

「…っ、…ん」

「良い子だね。辛いこともたくさん我慢して、それでもこうして生きていてくれた。叶流は強い子だ」

首をふるふると振る度に、瞳に溢れた涙がまたぼたぼたと落ちていった。

拭ってやりたい手は、未だしっかりと泣きじゃくる少女の両手を握っている。だから、言葉に「想い」を込めた。

「…これはお守りだ。必ず叶流を幸せにしてくれる…」

「…ううっ…、っ」

「…もらってくれるね…？」

「……」

「自分の幸せは自分で選んで決めるんだよ。そのための、お守りだ」自分の声がすとん、と少女の中に落ちたのがミナにも解った。

その言葉を聞いて、やがてゆっくりと首を縦に振る少女にミナは思わず笑みが零れた。

それを見届けてから、ミナは合わせていた額を離し、包み込んでいた少女の手も開放した。

「…お、おばあ、ちゃん…」

「なんだい？」

「お、おばあ、ちゃ、…は、…何に、守ってもらう、…の…？」

孫娘からの問い掛けに、ミナは自然と口元が綻む。

もう、少女に掛ける言葉はない。

目の前で迷子のような顔をしている少女に罪悪感がないと言ったら嘘になる。出来るなら健やかに、幸せに生きていて欲しい。その願いは本物だ。

だから、選ぶ力を未だ頼りない成長途中の少女に託した。

これが、今まで出来ずにいた「選択」だった。

「ありがとう、叶流」

どうか、この優しい少女に幸せを選択する力を

満足そうに微笑む祖母を見つめながら、少女は託されたペンダントを見つめる。

丸い透明な水晶の中には、窪みのある七色の球体。まるで月のクレーターを思わせるような窪みだった。

祖母は、それを「つがい」と呼び、一つだけ秘密を教えてくれた。

「受け取ってくれたお礼に、不思議な世界のことを教えてあげよう。あそこは月が一つじゃないの。…本当は」

まるで秘密を共有するように口元に人差し指を当てながら、祖母は答え合わせをするように「世界」のことを教えてくれた。

以上が、不思議な香りを身に纏い、いつも海の手を見つめていた優しい祖母と交わした最期の会話。

「…本当は二つ。…月も、塔も、…二つある世界…」

目の前に広がる光景と祖母の思い出を重ね合わせるように言葉を紡ぐ。

一度目を閉じて自分を落ち着かせてから、そつと目を開けると、闇夜に煌々と輝く白い月が、二つ。

「……」

目の前には二つの月光に照されてる廃れた円柱の塔。そして、自身が立っている場所もまた、目の前の廃れた塔を模写する如く同じもの。

ここは、幼い頃からずっと視続けていた祖母の「世界」そのものだった。

「…おばあちゃん、…ここ、どこ…？」

ずつと握り締めていた「お守り」に、語り掛けるように少女 あま 天川叶流 がわかなる は呟いた。

【 1 】

部活動の声が遠く校庭から聞こえる図書室。

「これ、今日の分」

無機質な声で、目の前の少女は叶流にメモを放った。

肩まで揃えられた綺麗な髪、少し吊り上がった釣り目の彼女は叶流同様同じ高校の制服を着込んでいた。

いかにも面倒だ、と言うような空気を出しながら机に向かって本を読んでいた叶流を見下ろす。

「…ありがとう」

「母さんから私のところにくるの困る」

「……ごめん」

「買い物リストぐらい別に良いけどね。でも携帯ぐらいは持って欲しい」

「……」

「連絡がつきにくくなるのは、…困るから」

声のトーンがいきなり下がったので、叶流は顔を上げて同い年の従妹の顔を見つめた。

苦しそうで、まるで迷子のような表情をしている。出来たらそつと抱きしめてあげたい、そう思っても行動に移すことは出来なかった。

立ち上がって伸ばそうとした手をぐつと握り締めると、叶流は笑顔を作る。

”大丈夫”と伝えるための笑顔は、同居が始まったときから身につけたものだ。

「……ごめんね。…かなめ要に迷惑掛けないように気をつけるから…」

「……」

「……」

彼女は何も言わず踵を返して図書室を出て行ってしまった。

夕闇が照らす図書室で、同い年の従妹・天川あまがわ 要かなめの背中を見つめながら、叶流はそつと放られたメモを握り締めた。

「……音楽室…、行こう」

ふ、と思いついたように口にとすると、ふらふらとした足取りで図書室を出る。

生まれた時から、自分には「母親」という存在はなくて、母親の”母”である「祖母」が母親代わりだった。

父は身寄りのない祖母をまるで自分の母親のように大事にしてくれたし、慎ましやかな生活だったけれど、とても幸せだった。

幸せに満ち溢れた生活だった。

けれど。

「…そつか…、父さんももう六年になるんだ」

指折り数えて父の死を受け入れられたのはいつだろう。

それでも祖母がいてくれた。

父の弟である叔父夫婦に引き取られた間も、祖母がいたから生活していくことが出来た。それなのに、祖母はもういない。

そんなことを考えている間に、音楽室に辿り着いた。

電気をつけようとした手を止めて、夜空を眺めるのに明かりは邪魔だ、と思い直した叶流は中に入りドアを閉める。

ふらふらと夜空が一番綺麗に見えるベランダの方まで歩くと、窓を開けて棧つるべに腰を降ろす。

秋の日は釣瓶落つるべとしとは良く言ったものだ。先ほどまでオレンジと赤紫のコントラストだった空に闇が混じり始め月が輝きを放っていた。

綺麗に浮かぶ月を見つめながら叶流は祖母からもらった「お守り」を取り出して両手で握り締める。

握りこんだペンダントが自分の体温でじんわりと温かくなったのが解る。

「…あれから、一年…。おばあちゃん、私、…16歳になっちゃったよ…」

ゆっくり瞳を閉じる。脳内にある記憶の引き出しをそっと開けると、叶流は喉を震わせた。

空気を震わせる吐息がメロディになり、口から発音される音は「歌詞」になる。

これはかつて祖母が聞かせてくれた歌。メロディも、歌詞もうろ覚えだけれど、祖母の気持ちはペンダントと共に在った。

懐かしい日々に想いを馳せ、祖母の顔を思い出しながら、叶流は心を込めて歌う。

”すべてを貴方に”

”すべてを星に 捧げます”

最後のフレーズを歌い上げると同時に握り締めていたペンダントを開放すると、叶流は大事に制服の中にソレを隠した。

大事なお守りだからこそ、歌う時だけ取り出し、それ以外は人の目に晒さない。

そうしてこの存在を誰にも知られないように努めてきた。

「…ふう」

叶流は嘆息を落とすと、電気の点いてない室内に視線を向けた。

視線の先には、何もかも飲み込む大きな「闇」。

包まれただけで「孤独」に囚われる「闇」だ。

「闇」は苦手だ。

まるで自分がこの世から必要のない存在だと宣告されているような気分になる。

そんなことを考えながら闇から目を逸らそうとした瞬間、奇妙な感覚に陥った。

ぐにやり、と空間が曲がったような感覚が叶流を襲う。なんだろう。気持ち悪い。

次いで聞こえてきたのは、しわがれた声。

「　　　いない、なんて誰が解るのさ」

どこからともなく聞こえてきた声に、叶流は自分の心の中を盗み見られた気分になった。

「自分一人の存在なんて、世界から見たらちつぽけなもんだよ」

誰もいない音楽室に響く声に、どこか懐かしさを感じたと同時に「言葉」が深く心に染み渡る。

おかげで驚くタイミングを完全に逸してしまった。

本来なら誰もいない音楽室でしわがれた声が聞こえれば悲鳴を上げて逃げていくのが普通だ。

しかし、昔から祖母の「不思議な世界」を見ていた叶流としては自然と「不思議」なものに対する耐性がついているらしく、それほど驚くことはせずにすなりと受け入れた。そんな自分に驚いて思わず呆ける。

「なに呆けた顔してるんだい」

しわがれた声が「やれやれ」とでも言わんばかりにその姿を現す。足の先から徐々に月光に照らされて現れたのは、小柄な銀髪の老婆だ。

額に高価な紅玉が施された装飾をつけ、白い布の上から緑色の上着を羽織っている。首周りは服の上から金細工で出来たペンダントをしておりその中心にあしらわれているものも、紅玉だった。

見るからいにどこかのファンタジー小説に出てきそうな、「神官」のような格好。

叶流は老婆の頭からつま先まで見つめると、「良かった」と安堵を漏らす。

「…ちゃんと足がある…」

至極当然のことを叶流が続けると、老婆は眉をぴくりと動かした。「あんだ、私を一体なんだと思ったんだい」

「…幽霊…」

「ちゃんと生きてるよ」

「…す、すいません…」

素直に頭を下げる叶流を、老婆はまじまじと見つめた。

今度は見つめられる立場になった叶流が、どんな顔をしたらいのか解らず無理に笑顔を作ろうとしていると、老婆は次に満足げに微笑んだ。

思わずつられてにつこり。

「容姿はそっくりなんだがね、どうして歌が下手なんだい。この音痴」

つられた笑顔が凍りついた。

この態度のでかい老婆は更に続ける。

「なおしてやる」

「はい…？」

老婆の言葉に思わず語尾が上がる。

別に自分の歌に自信があるわけじゃない。ただ、面と向かって「音痴」と言われたのは生まれて初めてのことで、どう対処して良いのか解らないだけだった。

魚のように口をぱくぱくしていると、老婆は若干苛ついた様子で詰め寄ってきた。

「音痴、なおしてやるって言ってるんだよ。聞こえなかったのかい？」

「…き、聞こえてました…」

「それじゃ、ミ」

「み？」

「ミの音だよ」

さあ出せ、とでも言わんばかりに言うので、叶流は慌ててグランドピアノまで駆け寄ると、指定の音の鍵盤を叩いた。

ポーン。音楽室にピアノの音が響く。

「ふん…、よし。よく、聞いているんだぞ」

自信満々に叶流に告げると、老婆は息を深く吸い込んで、その容姿には似合わない澄んだ歌声を奏でた。

「え、これ…」

透明感のある声で一音一音歌い上げた歌は、祖母が歌っていたあの「歌」。

月下で歌う老婆の姿はキラキラと光り、神々しく見えた。

伊達に自信がないわけじゃないらしい。妙に納得すると叶流はすぐにその歌声に聞き惚れていた。

「と、まあこんなもんだ。わかったかい？」

惚けた顔で見えていた叶流を見つめ、老婆はにっこりと微笑む。

力強い言葉とは裏腹に、彼女の笑顔はとても柔らかかった。

一瞬、祖母の笑顔と重なる。

「それじゃ、歌ってごらん」

想定外の一言に、叶流は現実引き戻された。

思わず全身が硬直する。

「ほら、早くおし。こちらら時間がないんだよ」

「で、でも…」

「でももへつたくれもない。せめて今日ぐらい、歌らしい歌を聞かせたらどうだい」

せめて、今日ぐらい。

老婆の言葉に心が震えた。

「今日」という特別な日を知っているのは、身内ぐらいのものだ。しかも、その身内でさえ自分のように故人を悼んでいない。

その事実が悲しくて、叶流は「今日」音楽室にいた。

自分だけでも祖母の生きていた証を感じていたくて、歌を歌ったのだ。

「…聞かせてやりたかったんだろう…？」

叶流がじつと老婆を見つめていると、老婆は眉を顰めながら背後の月を見やる。

その表情はどこか悲しげで、自分と同じ気持ちを持っているよう

に見えた。

「…あなたは…」

祖母を知っているんですか？

そう、聞いたかったが、老婆の顔が強張ったので叶流は口を噤んでしまった。

何か、彼女の気に障るようなことを自分が言ってしまったからだろうか、と考える前に老婆が口を開く。

「…ほら、来ちまったじゃないか…」

かなり面倒くさそうな顔をしながら、老婆は叶流の傍まで歩み寄る。

口振りからして自分に向けられた言葉ではないと解ると、叶流は内心ほっとした。

そして、ぐにやり。

老婆が現れる時に感じた妙な違和感を再び感じる。しかし、今度は「違う」。老婆の時よりも何かが、「違っていた」。

叶流を背にして暗闇の先にある音楽室のドアを静かに見つめる老婆の動きは、自然だった。

そこで初めて、叶流も「只ならぬ雰囲気」というものを肌で感じる。高まる緊張感、
さつきまであった月の光がない。

「
来た」

老婆からの低く短い言葉で我に返った叶流は、ぎょっとした。

暗闇に包まれた音楽室のドア。その先に、真っ赤に光った目がぎよるぎよると辺りを見渡している。

瞬きすらしない瞳に見つめられながら、叶流は恐怖に震える体をそっと抱きしめた。

こちらを伺う瞳、そしてゆっくりと形作られていく三日月状の口元。ニタリ、という言葉が正しいほど、その口元は不気味に開かれ

た。

刹那。

音楽室のドアが勢い良く蹴破られる。

「きゃああああっ」

思わず叫んだ叶流の声を聞いて、気を良くしたのか低く笑う声が不気味にこだました。

「見いつけた…」

暗闇に姿を隠すソレは、真っ赤な瞳と口元だけを浮かばせたまま言葉を発した。

その様子は幽霊を見るよりも恐怖を誘う。

一步一步、割れたガラスを踏み鳴らして、ソレはこちらに近付いてくる。叶流は向けられた殺気に背筋が粟立ち、足が竦む。

「ふんっ」

叶流と違い、目の前の老婆は真っ直ぐソレを見据えながら毅然と立っていた。

その背中を見つめながら、叶流はせめてこの老婆の邪魔にならないようにと、ピアノの椅子から下りるとちゃんと老婆の背後に回った。それからぐっと腹に力を入れてこれ以上恐怖に飲み込まれないようにする。

「…偉いね。肝が据わってる」

叶流の様子を感じた老婆が小声で素早く言うと、すぐに目の前のソレを向き合った。

別に肝が据わっているわけではない、と叶流は思ったが今はそれを言うべき時ではない。口を噤んで目の前のことに集中する。

「さっさとお帰り、単細胞」

「失礼な。…それでもババアの後を追う仕事が出来るぐらい、細胞はある方だ」

「なら、上司には私からよくやった、と言ってやる。だから、ここから出ていきな」

自分を庇いながら相手とやり取りと交わす老婆の力強い背中を見

ているだけで、叶流の竦んでいた足に血が通った。

負けてはいけない。

自然と、そう思った。

「…その女、この世界の人間か…？」

鋭い視線を叶流に向けてくるソレに、一瞬背筋がゾクツとした。

自分の恐怖が大きくなったのが解る。

それでも叶流は落ち着いてもつと腹に力を入れ、相手を見据えた。老婆を見ていて、自分に出来ることはそれぐらいだと思ったからだ。

「おまえさんにゃ、関係のないことだよ」

「……………愚かな」

一瞬、ほんの一瞬、悲しさに瞳を揺らめかせ、ソレの殺気が消えたような気がした。

「人間は自分達が生きるために動植物を犠牲にする。悲しいかな、それが自然の理というものだ。しかし、その理を崩したのは、

お前達人間だ」

「なんだと？」

「お前達は“もつと”を求める。だから、世界は滅びる。それもまた自然の摂理」

「それが本当の摂理ならば、私も滅びの運命を受け入れよう。しかし、この滅びに裏で手を引いているヤツがおる。…私は、そいつが許せんのだよ…」

「…だから、均衡を崩してでも伝承を繰り返そうとしているのか…今度は異世界の少女で」

その言葉を聞いた老婆の背中に、一瞬の動揺が走る。

ちらりと、肩越しに見つめられると、その瞳は揺らいでいるように見えた。

それは様々な感情が入り乱れてとてもじゃないが自分では汲み取ることの出来ない深い感情のような気がした。

「そう…、なるやもしれん…」

搾り出された声だけが叶流に聞こえて、老婆の表情までは見えな
い。

「シヴル様が仰っていたのは、こういうことだったのか……」

「おや、それがお前さんの上司の名前かい？」

ソレの言葉で視線を戻すと、老婆は相変わらずの調子で答える。
さっきの動揺など微塵も感じない。

「さあな」

暗闇の中で蠢くソレが、雲間から覗く月の光にその姿を晒し始め
た。

最初に見えたのは足元の獰猛な長い爪。それから足、二足歩行だ
が明らかにおかしい。全身が毛で覆われている。

顔は口元が耳まで裂けており、狼のような顔付きだ。俗に言う「
狼男」の容貌である。

正体を見ても、恐怖は収まらない。

叶流は必死に自分の恐怖と戦った。

「結果か……」

徐々に距離を詰めていた狼男が、ふと足を止めた。

狼男の視線の先は、自分と老婆のいる場所を包むように青白い半
円がある。

「……危うく足をなくすところだった。……ババア、言霊を掛けたな」

「あんだのような単細胞に殺させやしないよ、この子は私が守る」
しっかりとした意思のある声で、狼男を見据える老婆。

それを後ろから見ていた叶流は、なぜか祖母が頭から離れないか
った。

祖母の奏でる歌、そして託されたペンダント。

「非日常」が現実として目の前で起こっている事実、叶流は少
なからず自分が巻き込まれていくんだらう予感を感じていた。

どうか、守ってください。

叶流は制服の上からペンダントを握り締めて、祖母に祈る。

「結果を張ってるだけでも精一杯な気はするが……？」

「ぐだぐだとお喋りが多いヤツだねえ。…今すぐその体、木っ端微塵にしても良いんだよ!？」

狼男に食いつくような敵意を向けると、相手は大仰に肩を竦める。そして、狼男の表情に次第と「驚愕」の色が浮かび上がってきた。「…ただの伝承だと思っていたが…、あながち嘘じゃないんだな」「なんだって?」

狼男の言っている意味を理解するより前に、老婆は背後にいる叶流から声を掛けられた。そのまま叶流のいる背後を振り返ると、そこには驚く光景が。

「なんてことだい…」

叶流が握り締めていたペンダントが発光して、温かな光が辺りを照らしていた。

「運命の神は、是が非でもあんたに来て貰いたいみたいだね…」

不安に揺れる叶流の瞳をしっかりと見据えると、老婆は彼女の両肩を掴んでじつと彼女の顔を見つめた。

「大丈夫。怖くない」

安心させるように力強く響く老婆の声に、自然と涙が滲む。

突然起こったこの状況をどう処理すれば良いのか、高校生の叶流には解らないことばかりで、頭が軽くパニックになる。

わからないことが「解らない」。それが、怖い。

「ああ、泣かなくても良い。大丈夫、大丈夫だから…」

「…うつ、…ひいつ…」

自分の意思と反して、涙が次々と溢れてくる。

泣きたいわけじゃない、足も引つ張りたくない。

でも、涙がとめどなく溢れてしまう。

「本当は、あんたを巻き込みたくなかった。…ただ、…そう、ほんのちよつとあんたの顔を見に來ただけだったんだよ。……それから、遠い昔に約束を交わしたこいつに」

そう言つと、老婆はしわくちやになつた指で叶流の胸元を示す。

そこは、光を放つペンダントを握り締めた叶流の手。

「…会いに來ただけだった」

とても懐かしい友人に言うような、穏やかな声で老婆が呟く。

その言葉に、やはり自分の推測は正しかったと確信した。叶流は先ほど聞こうと思っていて飲み込んだ言葉を思い出す。

「祖母を、…知っているんですか…？」

「…ああ。私はユス。…この子と郷里を共にする者だよ」

そう言つて、心から敬意を表するようにペンダントを握り締める叶流の手の甲に指を当てた。

それから叶流の目元に溜まっていた涙をそつと拭う。

「残念だが、昔話をするには少々時間がなさ過ぎる」

瞬時に緊張感を纏う老婆に、叶流も「今はそれどころじゃない」と思い直した。

「…：良いかい、この結界はココじゃあまり長い間通用しない。それを知ってるから、あいつは黙つて見ているのさ」

「あと、…どれぐらいなんですか…」

「もつてあと三分」

「三分!？」

「そうだ。だから、その前になんとしても逃げるんだ」

「逃げるつて、どこへ…」

音楽室の出入り口はたった一つ。そこへ向かうためには、狼男を越えていくしかない。

あとは窓だ。しかし、ここは四階だ。逃げ切れる確立は一番高いが、生存率が一番低い。

方法が、ない。逃げられるはずがなかった。

「どこでも良い。自分が行きたい場所を願うんだ」

「そんな、…急に言われても…」

でもね、月は一つじゃないの。…本当は

突如浮かんだ情景。

祖母の歌が見せた「幻影」。

様々な草木が色とりどりにその世界を七色に染めていた。

二つの塔で向かい合わせに月に祈りを捧げる二人の少女。

そして二人は

ガラスが割れるようなけたたましい音で、叶流は我に返った。

意識が現実に戻ると、狼男がさつきよりも狂喜に狂った表情で少しづつこちらに歩を進めている。まるで狩りを楽しむような様子に、叶流は焦りを覚えた。

老婆 ユスは、苦虫を噛み潰したように狼男を見据えている。

「さあ早く！ もう時間がない！」

「ど、どこに、どこに行けって言うの！？」

焦れば焦るほどに頭の中は白くなっていく。

とにかく頭の中を整理しようともう一度考えるが、それ以上に狼男から与えられる「恐怖」に頭が回らない。

更に、ぱちん、と頭のどこかが弾けたような音がした。

このまま死んでしまうのも良いかもしれない。

そう思うと、急激に睡魔が押し寄せてくる。

眠れる状況じゃないのは重々承知しているが、このまま目を瞑って身を任せてしまったら？

次に目を覚ましたら祖母のいる場所かもしれない、そう思うと眠ってしまうのも良いような気がした。

自分に、帰る場所などないのだから

「馬鹿だね！ 帰る場所なんて一つじゃないんだよ！ 今、ここで死んだらいけない。あんたは、生きなきゃいけない！！」

意識が朦朧とする自分に、本気で訴えてくる声が聞こえる。

「カナル！祈ってごらん、感じてごらん！！」

辛うじて開いている視界では、ユスが狼男の攻撃をその小さな体で必死に受け止めているところだった。

助けなくちゃ、頑張って起きるんだ、と思いながらも意識は深く深く落ちていく。

「カナルッ！！」

白くなる意識の中で、ユスが名前を呼んでいる。

「キーワードは月だ！ミナから教えてもらったことを一つ一つ思い出して、辿り着いておくれ！…くっ、…そこに、…そこに　　が　　いる！　　の導きで渡れる！！」

薄くなっていく意識の中で、ペンダントの光が大きくなるのがわかった。

包み込まれる光の中、落ちていく意識の中で、大好きな祖母の歌が聞こえた。

”焦がれているの
いつか巡り会える時を祈って
私は歌う

貴方のために歌い続ける

籠の鳥のように
歌を貴方に捧げる

すべてを貴方に
すべてを星に　捧げます”

涼やかな声が聞こえる。

その歌声が徐々に大きくなると、最後に名前を呼ばれた。

叶流

ああ、おばあちゃんが呼んでる。

それを最後に、叶流は意識を手放した。

【 2 】

歌、が聞こえた気がした。大好きな祖母の「歌」。

まどろんでいた意識が微かに聞こえる音色で、覚醒した。

寝起きの頭で起き上がると辺りを見渡す。それから自分が眠っていたふかふかのクッションを見つめて、それがだいぶ大きかったことに気付いた。人が一人眠れるほど大きな丸いクッションを天蓋が覆っていたのだ。

叶流は寝ぼけ眼で目を擦ると、一つ伸びをして天蓋の外に出た。

「…う、わ…」

目の前に広がるのは、緑と青のコントラスト。

眼下に広がるのは鬱蒼とした深緑の森で所々に廃墟があり、緑の境から上にはどこまでも広がる蒼天。

肌を撫でる風は穏やかで、優しく、まるで「おかえり」と言うように囁いては叶流の傍を通り過ぎていった。

風と共に振り仰いだ天空には白い雲が気持ち良さそうに泳ぎ、叶流のいる塔を覆うように真昼の白い月が 二つ。

手を伸ばせば届くんじやないだろうか、と錯覚させるほどの大きさに叶流は息を呑み、そして。

「…夢じゃ、…ない」

昨夜、意識を失う前に見た、闇夜に煌々と輝く二つの白い月の姿を思い出した。

自分がいた世界と全く違う「世界」。
異世界。

「…こんな、ことって…」

一気に目が覚めた叶流は現実を目の当たりにして脱力した。
いくら「不思議」なことに慣れているとはいえ、さすがに「世界」すら違うのは参る。

言葉は通じるのか？

食べ物？

共通認識は？

むしろ、人がいるの？

目の前の環境に適応していくにはどうしたらいいのか、知らず知らず考えている自分に気付く。

「…結局、…私は受け入れている…？」

この状況を？

だとしたら、適応していくにはどうしたらいいか、なんて考えないんじゃないだろうか？

そんな結論に辿り付くと自嘲的な笑みが零れた。

「…可愛げがない…」

真っ先に「帰りたい」と声に出して言えば少しは可愛げがあったんだろう。しかし、逆立ちしてもそうは思えない。

何故なら、今までいた自分の「世界」には自分の「居場所」がないからだ。

自分にとって祖母も、父もない世界は「絶望」と同じだ。

例えあの家に帰れたとしても温かいご飯が待っているわけじゃない、ふわふわの寝床が用意されているわけでもない。

いつだって自分は「家族」の中に入れてもらえないあぶれ者。

「必要とされない人間」。

誰も、私を必要としてくれない

「……っ」

駄目。

思わず負の思考に落ちる自分に気付くと、叶流は咄嗟に自分の両頬を両手で挟んだ。

乾いた音と共に頬から伝わる痛みに暗くなりそうな視界が、広大な自然へと変化する。

ここでずっと座り込んでいるわけにもいかない。

「居場所」云々はどうでもいい。とにかく、生きて自分が生まれ

育った「世界」へ戻ろう。

嫌だろうがなんだろうが、結局自分が生まれ育ったのは、今まで父や祖母と生活していたあの「場所」なのだから。

「……？」

気持ちも新たに気合が入った叶流の耳に、再び音楽が聞こえてきた。

微かに聞こえるメロディに突き動かされるように立ち上がると、音のする方によろと歩き出す。

ゆるやかに吹く風を受けながら天蓋の傍の床に隠し扉を見つける
と、叶流は水晶で出来たドアノブに手を掛けた。

ぎい、と音を立てて隠し扉を開けると梯子が掛けられていたので、
叶流は隠し扉を開めながら慎重に後ろ向きで降りて行った。

「……しょ、つと」

最後の一段を降りて、塔の中を見渡す。

螺旋階段を照らすように等間隔で取り付けられているランプしかない。

叶流は壁に手をつけながら螺旋階段を一段ずつ降りていった。塔の中は思った以上にかび臭くないが、年代を感じる塔の香り何度も焚き染められた香の香りが入り混じっていた。

その香りになんとなく懐かしさを感じる。

階段を降りていくと徐々に聞こえてくる音色が大きくなり、それが「オルゴール」の音であることが解った。

更に音色が聞きなれたものだとは判別できるぐらいの大きさになると、あるドアに辿り付く。

まだ階段は続いているが、叶流はオルゴールの音色に呼ばれるようにその扉を開けた。

中に入ると柱時計と見間違っほど立派なディスクオルゴールが気持ち良さそうに鉄製のディスクを奏でている。

吸い寄せられるように部屋の中に足を踏み入れると、視界が開けた。ディスクオルゴールの傍らに四足のアンティークソファがあり、

そこで黒スーツの男性が横になっている。

二人掛けのソファは彼には少し小さいようで、すらりと伸びる足がはみ出ていた。

仰向けになって肘掛を枕にしながら、彼は寝息を立てている。艶やかな黒髪が綺麗で、見つめた寝顔もまた綺麗だった。

「……ん……」

彼が身じろぐ声で我に返った叶流は、彼が何も掛けていないことに気付き辺りを見渡した。

塔の中は、部屋の中でも肌寒いと感じてしまうほど冷えていたで、このままだと風邪を引いてしまう。しかし、辺りを見渡しても埃まみれの部屋にはディスクオルゴールと彼の寝ているアンティークソファの二つしかなかったので、叶流は自分がセーラー服の上から着ていた白いセーターのボタンを外した。

足音を立てないよう、ゆっくりと彼に近付くと叶流は眠る彼を起こさないように、そっとセーターをかけてやる。

彼を起こさずにセーターを掛けたことに満足すると、叶流は思わず笑みを零した。

「……」

それから、眉間に寄せられていた皺を人差し指でそっと撫でてやる。

やんわりと解れた眉間を見て、ほっと安堵すると前髪の下にある紫色の瞳とかち合った。

まるで宝石のような輝きを放つ瞳の色に吸い込まれそうになっていると、男は黒革の冷たい手袋越しに叶流の頬に触れ、後頭部を掴むように腕を伸ばしてくる。

「あ、あの、お、はようござい　　っ!？」

彼の手が後頭部を掴んだ、と思うとそのまま引き寄せられ、

唇を塞がれた。

「んむうつ!？」

初めて感じる柔らかな感触に叶流が目を白黒させるが、男はそん

なこと知ったことが、と平気で口付けを続ける。

唇を舌で舐められると再び吸い付いてくる。初めてのことにどうして良いか解らないまま男の唇を受けていると、息が出来ないから意識がぼやけてきた。部屋には唇を交わす卑猥な水音が響き、何度も何度も吸い付いてくる唇に抗えずにしていると、ようやく男は満足したように唇を離し怪訝な顔で叶流を見上げた。

「誰だ？」

その冷たい声で我に返ると、まるで自分が彼を押し倒しているような体勢でいることに気付き、叶流は思い切り身体を引き起こした。しかし、男は上半身を起こすなり逃げる叶流の腕を掴んで引き寄せ、あるうことがそのまま腕に抱きしめる。

「むきゅっ！」

スーツに顔を押し付ける形で彼の胸に飛び込む形となり、叶流はかなり慌てた。

男性の膝の上に乗ることも初めてであれば、こうして抱きしめられるなんてもつてのほかだ。

じたばたともがいていると、耳元に唇を寄せられる。

「殺されなくなったら大人しくしている」

底冷えする声と物騒な言葉で思わず身体が硬直した。

「それにしても、人が悪いぞ、おまえら」

男の呆れ声に返事をするように現れたのは、女と男。

女は天井裏から姿を現し、男はドアを開けた入り口に背を預けている。

二人とも実に意地の悪い笑みを称えていた。

「だって、スーったらうたた寝してて可愛かったんだもの」

うふふ、と口元で笑いながら長い黒髪を後頭部でまとめて縛り上げてる黒スーツの女が答える。

その口元には人の悪い笑みを称えていて、男は女の表情を見て嘆息を漏らした。

「…仮にも俺が襲われたらどうするんだ」

「そこはご心配なく。ちゃあんとその子に照準合わせてたし、何かおかしな真似してたら間違いなく殺ってたよん」

手元の銀製の短銃をひらひらと見せつけながら、それをくるくる回して女は肩下のホルターに戻す。

その仕草があまりにも手馴れていて、物騒な言葉と同様叶流の背筋を冷たくさせた。

「でも予想外だったのは、スーの行動」

「何？」

「……いいえー。なんでもありません」

「言いたい事があるならさっさと言え」

「まあそうピリピリするなよ。それに、おまえも気持ち良さそうだったじゃないか」

言い争いになりそうなところでやんわりと間に入っただのは、ドアに凭れてた黒髪短髪の男性。彼は黒スーツに似合わない二つの剣を腰に携えながら部屋の中に入ってきた。

「なにがだ」

「そこで普通に聞き返しちゃうスーってば変態！」

「誰が変態だ」

「シリウス、落ち着け。実年齢と精神年齢が噛み合っていない子供を相手にするな」

男の言葉にふむ、と納得すると「そうだな」と平然と返す。

それに抗議をしようとした女を、双剣の男が一言で諫めた。

「…フィデス」

存外に、「これ以上引つ掻き回すな」という双剣の男の言うことを聞いたフィデスと呼ばれる女は、唇を尖らせて口を噤んだ。

「…お前らが警戒を解くってことは、こいつは俺に何もしてないんだな？」

会話の流れが途切れたとを確認してから、嘆息と共に叶流を抱きしめるシリウスと呼ばれる男が言う。

その言葉に、フィデスとテアは呆れ顔だ。

「むしろ、したのはシリウスの方だと思うが…？」

「……さっきの口付けのことなら、ライに礼儀だと教わった」

「スー！違う、挨拶違う！！」

「シリウス…、ライジェル様から教わった礼儀は、心通わせた男女がするものだ。見ず知らずの女性にするものじゃない…」

驚くフィデスに、呆れる男。

そんな二人の反応を見たシリウスという男は「そうなのか？」と小首を傾げる。

「そーよ！それに、彼女初めての口付けだったらどうするの？ 女性にとつての初めての口付けは特別なもののなのよ？」

「どうするもなにも、俺も初めてだからおあいこで良いじゃないか」しれつと返答したシリウスに、二人ははあ、とため息をついて頭を抱えた。

叶流はこの三人のやりとりにつきり毒気を抜かれて、ガチガチだった身体からある程度力を抜いた。するとシリウスの胸元が視界に入ってくる。そこには叶流が祖母からもらったペンダントと同じものがぶら下がっていた。ただし、叶流のものとは違い水晶の中にある球体の色は彼の瞳に似た紫色をしている。

「つがいの色が珍しいのか？」

唐突に頭上から声を掛けられ、叶流は顔を上げた。

「っ！？」

すると、至近距離に彼の顔があり、その近さに驚いた叶流はシリウスの腕の中から慌てて抜け出した。

「あ、スーが逃げられた」

「ふむ。どうでる？ シリウス」

「…おまえら少し黙ってろ」

今後の展開を期待するように楽しんでいた二人は、シリウスの言葉に肩を竦めるとその言葉通りそれ以上口を開かなかった。

そして、叶流の背後に回ること彼女の退路を断つ。その二人の行動から、叶流は自分が試されているような気分になった。

「……名前は？」

シリウスはソファに腰掛けながら、まるで尋問するように叶流を見つめた。

叶流はその瞳に逆らえない強さを見出し、ここは素直に返答することにした。

信じてくれるか、そうじゃないか、は彼らの判断だ。そう思って、自分の名前を口にした。

「……叶流です」

「カナル……？」

「……そう、ですけど……」

「……」

素直に名前を答えただけなのに、黙ってしまったシリウスを見て叶流は逡巡した。今の短い受け答えで自分に非があるとは到底思えない。それとも言葉が通じない部分でもあったのか。

けれど、彼は沈黙していた理由は述べてに話を続けた。

「見慣れない服を着ているが、……どうやってここにきた？」

「……え？」

「この塔は、ある王家の人間とその側近しか知らない場所。一般人がこれるようなところじゃない」

その言葉に、叶流はどう説明したらいいのだろうか、と思考を巡らせた。

「……あの……。私、き、気付いたらこの塔の一番上にいたんです」

三人の空気が変わる。

それでも叶流は自分の身に起きた出来事を知ってもらったために、正直に事実を語った。

「私、昨夜学校の音楽室で歌ってたんです。おばあちゃんの命日を一人で悼んでました……。そ、そうしたら……っ」

今でも脳裏に焼きついている。あの獣人の獰猛な笑顔と、それを食い止める小さな老婆の姿。

今戻っても助けられないかもしれない、それでも彼女の無事を願

「あ、あの…」

「恐らくユスは大丈夫だ。心配ない。…ただ、問題なのはあんただ」

「わ、私…!？」

「スー、どうするのー？ 思わぬ拾い者しちゃったけど」

「……とにかく、一度ライジェルのところに戻ろう。詳しい話はそれからだ」

そう言ってシリウスがソファから立ち上がると、二人は頷いた。

【 3 】

「行くぞ」

立ち上がったシリウスに腕を取られた叶流は、歩き出した彼に引きずられるようにドアへと歩を進める。

コンパスの差なのか、気付けばテアとフィデスの間を通り過ぎ、シリウスは部屋から出る一歩前だったので、叶流は慌ててシリウスの背中に声を掛けた。

「え、あ、あの…っ!」

叶流の声に足を止めたシリウスが振り向く。その表情は、不機嫌そのもの。

「なんだ」

冷たい視線に身体が震えそうになったが、それをぐつと堪えて逆にシリウスの瞳を見つめた。

「…わ、私は、…私にとって誰が敵で、誰が味方なのか検討がつきません」

「だからなんだ」

「わ、…私にとって、あなた達は、…敵、なんです、か…?」

見極めなければならぬことはたくさんある。

ユスは自分のことを助けてくれた、だから少なくとも自分の「味方」でいてくれる可能性が大きい。けれど、彼らはユスのことを知っているだけであって、自分の味方であるとは限らない。

だから、今の段階で何を信じるのかを自分で判断して、自分で決めなければならなかった。

そのためには判断する材料が必要だ。この問い掛けは、その一歩。……」

叶流の言葉を受け止めたシリウスは彼女の手を離し、こう問いかけてきた。

「…では、逆に聞こう。

おまえは、俺達の敵か？ 味方か？」

まさか同じ質問を返されるとは思わなかった叶流は、目を丸くした。

「俺達についてくるか、こないか、自分で決める」

更にそう続けられた言葉に、叶流は衝撃を覚えた。

今まで自分で決めてこれたことなど何一つないし、このように選択肢を与えられることすらなかった。

父が亡くなったときも、選択肢を提示されることなく叔父夫婦の家に引き取られ、高校受験でさえも「要と同じところに」というある意味命令の元で決まった学校だ。

周りに迷惑を掛けないように、と生きてきたが、結局は周りの言いなりになって生きてきた自分に、叶流はシリウスの言葉で初めて気付いた。

「……自分、で…？」

「ああ」

「なにも、わからない、の、に…？」

「わからないことに甘えるな。自分の選んだ選択を信じるぐらいしてみる。…おまえが背負う運命はそんな生易しいもんじゃない」

自分の背負う運命など知らないのだから、そんなことを言われてもどうしようもない。

けれど、彼が言っている言葉は不思議と上辺だけに聞こえなかった。厳しい言葉の中にも、説得力がある。

もしかして、彼も？

そう思ったのが相手にも伝わったのか、シリウスは叶流の瞳を見つめたまま口を開いた。

「俺もそうだった」

「！？」

まるで心が通じ合ったのか、と思えるほどの回答具合に叶流の目が瞬く。

シリウスは思い出を語るように一言一言口にした。

「…十四の時に、突然帰る場所と家族を亡くした。…両親二人から

最期にもらった言葉は”生きる”だ。俺には考える時間も、選択肢すら与えてもらえなかった」

その声に悔しさが滲んだのは、きつと思いついておかしじゃないだろう。感情のない冷たい紫の瞳が、一瞬だけ揺らいだのが解った。

「……私と、テアは、シリウスの両親から彼を守るようにお願いされたの」

遠慮がちなフィデスの声が背後から聞こえる。

フィデスが心痛を感じながら言葉を紡いでいるのが良く解る。きつと、「その日」を思い出しているんだろう。

聞いていた叶流の心も痛んだ。

「二人を信じなければ俺は死んでいただろう。……だから、俺たちに黙ってついてくる事に疑問を持ったなら、自分で決めろ」

「……」

「信じる、ということはそれだけ大事なことだ。……おまえは、俺達を信じる事が出来るか？」

「……」

「……俺は、おまえが俺の信じる二人を信じる事が出来なければ、連れて行けない」

そう真剣に語るシリウスの瞳は、深い紫の色をしていた。

両親と帰る場所を喪った。それは自分も同じだ。両親も、待つていてくれる人も、今の自分にはない。でも、彼の言うように「信じられる」人がいた。ずつと、傍に居てくれた人がいた。

叶流はそつと制服の上から”つがい”を握り締め、その人物を思い浮かべる。

叶流？

「……」

自分が迷ったときは、触れてごらん？

触れる？

そう。相手に触れて、心に触れるの。

「……相手に触れて、心に触れる……」

唯一自分に慈愛を注いでくれた信じられる人 祖母 の言葉を思い出して、口に出して確認する。

シリウスは黙ったままこちらを見つめていた。

「……」

叶流は意を決して、シリウスから瞳を逸らして背後に振り返る。息を飲んで叶流とシリウスのやりとりを見守っていたテアとフィデスの茶色の瞳が叶流を捉えた。

「フィデス、さん……？」

「……ええ」

叶流はフィデスの返事を受け取ってから、彼女に向かって一歩踏み出した。

その様子を見ていたフィデスは一瞬だけ動揺を見せたがすぐに緊張を身に纏い、くりくりの茶色の瞳をずっと細めると躊躇なくスーツの胸元に手を差し込んだ。

そこにはホルターにしまわれた短銃がある。フィデスはそれを引き抜くタイミングを見計らっているように叶流を見つめていた。

それでも叶流は戸惑うことなくフィデスの前で立ち止まる。

「……」

身長は、160センチ後半といったところだろうか。

艶やかな黒髪は頭上で一つにまとめられており、毛先が腰までかかっている。髪を下ろしたら相当長いことは伺えた。

黒のパンツスーツをきっちり着こなし、細身なのに出るところが出ている。まさに大人の女、といった外見。

そつと見上げたフィデスの顔は、緊張と戸惑いに満ちていた。武器をすぐに取り出さないのが、戸惑っている証拠だろう。

「失礼します」

一言。

叶流はそのたった一言を呟くだけ呟いて、返事を待たずにフィデスの肩口に顔を埋めた。

「ッ!？」

突然の出来事にフィデスの身体が一瞬だけ硬くなった。

銃を握る手に力が込められるのも、抱きしめている叶流には解っていた。

それでも叶流は離さなかった。ほんの少し覗いた殺意の欠片を彼女から読み取っても、抱きしめることをやめなかった。

「……」

一心にフィデスに触れてきた叶流を見下ろすと、フィデスは次にシリウスを見つめる。

その瞳からは何を読み取ることも出来なかったが、いつもの彼らしい「優しさ」を垣間見た気がした。

「まったく……」

嘆息と共にそう零したフィデスは、抱きしめてきた小さくて柔らかな叶流の身体をそっと抱きしめ返してやる。

その手に武器は握られていなかった。

「……」

叶流はフィデスの心音を聞きながら、彼女に触れているところを感じた。

嫌な感じはしない。嫌悪感もない。そっと抱きしめ返された彼女の手からは、「優しさ」を感じ取ることが出来る。

大丈夫。この人は、悪い人じゃない。

「……フィデスさん、ありがとうございます」

叶流が納得したところで抱きしめていた腕を解き、につこり微笑むと、フィデスはきよとした顔をしていた。

このとき初めて、叶流はフィデスが童顔だったことを知る。瞳の大きさだけでこんなにも顔の印象が変わると思ってもみなかった。最後にぺこり、とお辞儀をして、次に隣にいるテアに向き合う。

「テアさん」

「…なんだ」

「いきます」

「…なに!？」

153センチしかない自分の身長と比べるとかなり高いだろう。

短髪のため毛が立っているように見える黒髪に茶色の瞳。

黒のダブルスーツを着ている彼からじろりと見下ろされると恐怖を感じるが、叶流は気合を入れて身長180センチほどの大男に近付き 両腕を広げた。

その様子に何をされるか理解したんだろう、テアは叶流の頭に自分の手を置きこれ以上近付かないように防衛。

「…テアさん、ぎゅうって出来ません」

「いない」

「大丈夫です！ 怖くないですから！」

「そういう問題ではない」

噛み合った会話とは言い難い短い言い合いに、噴出したのはシリウスだ。

「…シリウス…」

笑い出したシリウスに呆れる声でテアが難色を示すと、彼は笑うのをやめてテアを見つめた。

「テア…、言う通りにさせてみる」

「し、しかしシリウス…！」

「…大丈夫だ。おかしいことをしようとしたら、さつきフィデスの時おまえがしたように、今度は俺が斬る用意をしておく」

物騒な会話に一瞬だけ背筋がゾツとしたが、叶流は両腕を広げ頭を抑えられたままテアの手が退くのを待った。

「……」

「テア」

シリウスからの一言で観念したのか、テアの大きな手がそっと叶流の頭から退けられた。

叶流はテアを見上げて、「失礼します」と小声で謝罪するとテアの腰を抱くように腕を絡めた。

「…っ」

かちんこちに固まったテアは、両腕を宙に浮かせたまま叶流の様子を伺った。

「…おまえは、抱きしめ返さないのか？」

腰に下げている剣の柄を握りながら、シリウスは少し楽しそうにテアをからかう。

「シリウス、人の悪い冗談はよせ…。俺が女苦手なのは知ってるだろう…」

そう返したテアの声はまさに困り果てている。

テアの空気を感じながら、叶流は胸に耳を当て心音を聞いていた。少し速い。でも、戸惑いしかない彼の身体に嫌悪を感じないことさえわかればそれで良い。それに、シリウスとの会話を聞いていたら、悪い人だとは考えにくい、と単純な頭で理解した叶流はそっとテアを離して、彼を見上げた。

「…急に抱きついてすみませんでした。ありがとうございます」

「あ、…い、いや…」

相変わらず困惑を露にしたテアのダークブラウンの瞳を見つめて、会釈を返す。

思わずテアもぺこりと頭を下げた。

うん、悪い人じゃない。

確信が持てた。

あとは、一人。背後にいる人。

「……次は、俺か？」

自分の肩越しから見たシリウスは、両腕を前で組みながら叶流を見つめている。

叶流は身体を完全に振り返ると、シリウスを見つめて一歩ずつ近付いた。

自分よりもすらりとした身長。テアよりは小さいので、たぶん1

70センチほどの大きさだろう。

艶やかで綺麗な漆黒の髪はさらさらで、真っ直ぐな前髪から覗く切れ長の瞳の色は紫。宝石のように冷たい輝きを放っている。何度見ても思っけど、この人は本当に「綺麗」という形容詞がとてもよく似合う男性だった。

格好良いというか、なんというか。

そんなことを考えながら叶流がシリウスに近付くと、徐に両腕を解くシリウス。

「…シリウス、さん…？」

「なんだ」

「いきます」

「どうぞ」

平然と言う彼に、そつと近付いて両腕を広げる。

ぎゅゅと抱きしめると、シリウスもぐつと抱きしめ返す。見た目よりも筋肉がついているのか、がっしりと受け止めてもらえた。そんな彼の腕の中にすっぽりと閉じ込められると、先ほどとは違う感覚を感じる。

どことなく胸元の”つがい”が温かいような気がする。

「……あつたかい」

思わず漏れた言葉に、触れている部分から身体を伝ってシリウスの声が聞こえた。

「生きてるからな」

その言葉に、叶流はシリウスの話を聞いていた時から考えていた言葉を思わず口から滑らせる。

「…辛かった…、です、か…？」

相手は一瞬戸惑うように身体を硬くしたが、すぐに身体の力を抜くように言葉を紡いでくれた。

「……おまえに比べたらそうでもない」

「私？」

「…おまえは、故郷から完全に隔離されただろう？ なにも知らない

い土地で、自分のことを知らない世界に、身一つで放り出されたんだ。しかも帰り方もわからん…。自分の味方がいないのは…、さぞ、辛いだろ」

そつと頭に暖かな感触を感じる。

その温かさはしっかりと心に伝わった。言葉もまた、優しい。

頭を撫でられる感触にすっかり気を許してしまった叶流に、頭上から気遣われる声が降ってきた。

「辛くないのか…？」

「…わかりません」

「解らない？」

「…私、きつと辛いつて感覚が麻痺してるんだと思います。辛いことを辛いつて思ったら、本当に辛くなる…。だから、辛くても”辛くない”って自然と自分に嘘をついてしまっんです」

苦笑しながら、叶流はシリウスからそつと離れた。

引き取られた叔父夫婦には、「家族」として受け入れてもらえなかった。自分に対して温かくない空間。その温かさをくれたのは、祖母だった。だから、「温もり」を祖母に求めた。

どんなに自分が頑張つて家のことを手伝ったり、叔母のいう事をきいたりしても、誰一人自分に「温かさ」を与えてくれる人はいない。そうしていくうちに、諦めることを知る。

最初から求めなければ、落胆する事もない。それを「辛い」と感じる事もない。

だから、心を「無」にする。

何をされても、何を言われても。

そつすることで、自分をかろうじて保ってきた。

けれど、祖母が亡くなってから一年。正直、自分でも自分を保つ方法が解らなくなってきた。

それでも叶流は自分に「嘘」をつく。心を曲げて、生きてきた。

「…平気です、よ…？」

それは、「自分自身に嘘をつくこと」、なのか、それとも「辛い

と思えないこと」か。

もう自分でも麻痺して解らなくなっていた。

「……………そうか」

そう言った彼の瞳が一瞬だけ悲しみの色に染まる。

優しい人なんだ、きっと。

そんなことを思いながら、叶流は心配させないようにシリウスに笑顔を作ると、自分の「答え」を口にした。

祖母の言う通り、触れてみて解った。

この人たちは、悪い人じゃない。

少なくとも、自分にとっては。

「私、あなた達を信じます」

これが、この世界に来て初めての「選択」。

【 4 】

叶流の言葉を聞いたシリウスが、満足そうに瞳を細めると良くやった、と言わんばかりに叶流の頭に大きな手を置いた。

「……………ありがとう」

シリウスはそれだけ言うと、踵を返して歩き出したがもう一度戻ってきて叶流の手を握るなり引きずるようにして部屋を出て行った。

「え、あ、ちょ…っ!!」

叶流は歩き出すシリウスの背中を追いかけるように、小走りで部屋から出て行った。

その二人の後ろ姿を見て、呆然としていたのはテアとフィデスだ。

「…あれは、相当嬉しかったみたいね、スー…」

「ああ」

ちらりと見上げた先のテアの表情もなんとなく柔らかいので、フィデスは「あなたもね」と心の中で付け加えると気持ちを切り替える。

「さて、と、…私達はどうします？」

「暫くは様子見だ」

「警戒は？」

「無論する」

「完全に信用はしてない、ってことですか…」

「まあな。しかし、……嫌いじゃない」

そう言って、二人を追いかけられるように歩き出したテアの背中を見つめながら、フィデスは初めて柔らかな笑顔を浮かべた。

「同じく私も」

それだけ呟くと、フィデスはソファの傍に落ちていた叶流のセーターを拾い上げ、すぐに三人の後を追って部屋を出た。

二人よりも先に部屋を出た叶流は、シリウスに腕を引かれながら螺旋階段を下りるのに必死だった。シリウスの足元と自分の足元を

見ながら、とにかく転ばないように努める。

「…あ、の…」

「なんだ」

そっけない返答に叶流は喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。

背中だけしか見えない階段内で、シリウスの表情は読めない。もし不機嫌だったら、自分の言葉で更に機嫌を損ねてしまうかもしれない。叶流はすぐに「なんでもない」と返そうとしたのだが、それよりも早く背後のテアから声が掛かる。

「シリウス、速い」

「…速い？」

「ああ。その速度だと、この子が転ぶ」

「きゃあっ！！」

テアの一言でぴたりと歩を止めたシリウスが振り返ると、必死に追い付こうとしていた叶流が突っ込むように降ってきたので思わず抱きとめる。叶流の心臓が音を立てているのが身体越しに伝わってきた。

「…息が上がっている…？」

自分としては普通に歩いていたらつもりだったが、この少女にとってはかなりの早歩きだったらしい。

驚きの声を上げたシリウスに、テアが呆れた声で「当然だ」と呟く。シリウスは抱きしめていた叶流をそっと放して、息を整えている彼女を見つめた。

「速いなら、速い、とちゃんと言え」

「…う、ごめんなさい…」

すぐさま頭をぺこりと下げる。

素直に謝った先では、紫色の瞳が困惑の色を浮かべていた。

「……まったく、おまえは素直だな」

柔らかな言葉が降ってくるかと思えば、次に耳元に唇を寄せられ、息が止まる。

「俯くな。…信じろ」

と、だけ言々と再び手をとって螺旋階段を降り始めた。

今度は先ほどよりも速度を落として。

叶流は何も言えないまま、シリウスの背に着いていく。革手袋越しだったが握られた手が温かくて、不思議と安心した。

一度触れ合ってしまったからだろうか、凄く自分の気持ちが落ちてきているのが解る。

シリウスも、テアも、フィデスも、戸惑いながらも自分を受け止めようとしてくれているのが理解出来た。

だから、自分も同じように三人をもっともつと信じていけるよう、努力しようと思う。

気持ちも新たにそんなことを考えながら階段を降りていくと、出入り口に到着。シリウスが門式の鍵を開け、ドアノブを手すると躊躇いなく開ける。

ぎいつと音を立てて開いた扉から外に出る。

「……っ！」

暗闇に慣れていた目に陽の光が眩しくて思わず手を翳した。

「テア。馬車の用意をしてくる。すまないが、それまでこいつを頼む」

「シリウス、馬車ぐらい俺が……」

「良い。ちょっと体を動かしたい」

「……解った。頼む」

テアとシリウスの短いやり取りのあと、シリウスは木々に囲まれた目の前の一本道を駆け足で降りて行った。

塔の外は外周の五メートル先ぐらいまで石畳で、そこから先は鬱蒼とした木々が茂っている。まるで”遺跡”を見ているような気分だ。ふと塔を見上げると、もう一つの塔も視界に入り込む。

「……」

本当に同じ形をした塔が、もう一つある。

しかし、叶流たちがいる塔の方がどちらかというと廃れていた。

元は白かったんだらう、年月を感じさせることにくすんでいる反対

側の塔に比べて、この塔は更に人がいなくなつて時間が経っているように黒褐色に染まつていた。

蔦の絡まり具合も全然違う。

「…あの、もしかしてここつて長い間手入れをされてなかったんですか…？」

隣にいるテアに向かって言葉を掛けると、テアは叶流の視線を受けて同じように二つの塔を眺めた。

「ああ。…向こうに比べて、こちらの塔は早くに巫女がいなくなつた」

「巫女が、いなくなつた…？」

「ああ。先ほどシリウスも話していたように、この塔は祈りを捧げる場所だ。そのためには、祈りを捧げる者 巫女 がいる」

「…ということは、巫女も二人いたんですか？」

「そうなるな」

「…でも、この塔の巫女だけは早くにいなくなつてしまつた…？」

「……まあ、平たく言えばそういうことになる」

「じゃあ、こちらの塔ではなく、あの塔を守っていた巫女つていうのが、ユスさん…？」

「ああそうだ」

「今は、どうなつてるんですか…？」

確か、ユスは引退していると先ほど聞いた。

ということとは、あの塔もこちらののように無人なのだろうか？

「あの塔には現在、引退した巫女の血筋を受け継ぐ者がいる。…完全に無人なのはこの塔だけだ。…ココだけは、後継者がいない」

テアの言葉にもう少しだけ「巫女」の話を聞きたかったが、その前に聞こえてきたフィデスの声によって、興味が移る。

「《閉まれ。鍵を掛ける》」

そう言つて、塔の扉の前で両手を翳していた。

その言葉と仕草に心惹かれてみると、テアが「もう興味が移つたのか」と言わんばかりに口を開く。

「…言霊だ」

叶流の視線にテアが答えたので、叶流はテアの茶色の瞳を見つめた。

「ことだま…？」

「ああ。フィデスは、”言霊”を扱える」

端的に説明を受けた叶流はこちらに向かってくるフィデスを捉えたまま、もう一度口の中で「言霊」と呟いた。

”言霊”。

そういえばユスが守ってくれたときもその言葉を聞いた気がする。ユスは無事だろうか。

そんな風にユスのことを考えると心配になるが、叶流はシリウスの言葉を信じて見上げた青空にユスの無事を祈った。

「来たぞ」

テアの言葉で視線を青空から戻すと、少し先にシリウスが馬車を停めているのが見える。

シリウスは馬から下りて馬車のドアの前でこちらを見つめていた。

刹那

テアとフィデスが叶流を守るように前に立つ。

ぴりつとした空気を感じて、穏やかな日差しとは裏腹に自分達を取り巻く空気が殺気と緊張感に包まれていることを知る。

同時に、シリウスがこちらに向かって駆けてくると二人の前に立ち、長剣を抜く。テアもフィデスも各々に双剣と短銃を構えた。

「鼻が利く奴等だ」

舌打ちと共に聞こえたのはシリウスの声。

叶流はせめて足手まといにならないように、神経を尖らせて辺りの空気を伺っていた。

「…まあしかし、これで彼女が言っていたことが本当だということ
は解った」

「彼女…って、この子？」

「ああ」

フィデスの問いに答えたのは、シリウス。

シリウスはそつと長剣を上段に構えるとすうつと息を吸いこみ、ゆっくりと吐き出す。

「…恐らく、こいつの言っていた狼男とは獣人のことだ。奴等がユスを追つて”月越え”をしたんだろ。そして、ココへきた」

「ふんふん」

「しかし、伝承のことなど半信半疑だった奴等は近くで様子を伺っていた」

「あら、それじゃあまるで私達のようなね」

フィデスがにつこり微笑むのと同時に、銃口を右真横に向けると躊躇なくトリガーを引いた。銃声と共に程なくして聞こえたのは、葉擦れの音、そして　どさ、という大きなものが倒れた音。

それを皮切りに、周囲から同じ甲冑に身を包んだ者達がぞろぞろ現れる。

フィデスはすぐに両足を揃えて跳躍、叶流の頭上で何発か銃声を放ちながらくると伸身宙返りをする、すんと叶流の真後ろに降り立つ。

テアとシリウスは既に地を蹴り、フィデスの銃声が当たってない甲冑に向かって斬り込んでいる。

「…う、わ…っ」

二人とも強い。

シリウスは流れるような動きで長剣を操り、一人ずつその身を地面に沈めていく。

テアも双剣を巧みに操り、一度に数人を薙ぎ倒していった。流血がないことから、二人とも峰うちを狙っている。素早い動きで更に峰うちを狙えるのは素人目で見ても解るほどの高等技術だ。

「…関心しないの、っと…！」

葉きょうがからんからんと落ちる音を聞きながら、背後から両肩

に二つの腕がによきつと出る。

次いで、フィデスの声。

「ちよつと煩いけど我慢して！」

その前にはトリガーを引いていたので心構えなんぞ出来る訳がなかった。

伸ばされた腕の先で銃声が響くと、シリウスとテアを背後から襲おうとしていた輩がその場に次々と伏す。足から崩れていくので、撃ち抜かれたのは足だと思う。

「楽勝！」

銃声が止むと同時に、フィデスの機嫌の良い声が耳に入ってくる。まだ脳内で響いている銃声に頭をぐらぐらと揺らしながら、叶流は戦況を見守っていた。

ある程度兵士達が倒れると、テアとシリウスが落ち着いたように剣を下ろした。足元には十数人の兵士達がうめき声を上げて倒れている。見渡す限り兵士の存在が視認出来ないのもう戦いに終止符が打たれるだろう、そう思って叶流がひっそり安堵していると。

「なるほど」

突如拍手と共に馬車の影から現れた司令官らしき兵士が不敵な笑みを浮かべていた。

「…簡単には渡してもらえないようですね…」

「急に攻撃を仕掛けるとは、一体どういう用件か？ アンティクレイアの者」

シリウスの問いに、アンティクレイア兵が不敵な笑みを浮かべる。

「用件？ それは貴殿もわかってるだろう？」

「わからんな」

「……その異世界の女だ。」月の乙女”を我らに渡せ」

余裕のあった笑みが、一瞬だけ苛立たしげに歪む。

悪寒が背筋を這い上がり、叶流はフィデスの後ろに隠れて彼女のスーツの裾を掴んだ。

「…大丈夫よ。…あなたは私達を守る」

叶流の行動に答えるように、フィデスが小さく囁いた。

たった一言だけだけれど、心に響く言葉だった。

「もう一度言う。」月の乙女”を我らに差し出せ。そうすれば、命だけは助けてやろう」

偉そうにそう言ったアンティクレイア兵の声に返事を返したのは、シリウスだ。

「断る」

「なぜだ」

「あれは、”月の乙女”ではない。偽者をアンティクレイアに渡すほど、俺も馬鹿じゃない」

「……」

向こう アンティクレイア兵 が様子を伺っている。

嘘か、真か、ただそれだけのためにシリウスの瞳をじっと兜の下から見つめていた。

「…本当だろうな？」

「ああ。付け加えるなら、あれは俺のモノだ」

「……なに？」

怪訝な顔をした男に、口元を歪めるシリウスの表情を見てテアとフィデスも口元を緩める。

「確かあー、”月の乙女”はその名の通り、純潔のはずよね？ でも残念ながらこの子はもう、乙女じゃないのー」

「お前らがどれだけ俺達を監視していたのか知らないが、この娘は純潔ではない。泣き叫んで可愛そうだったが、この男に無理やり……」

ころころとフィデスが笑いながら言うと、驚愕したアンティクレイア兵に更にテアが言葉を続ける。

その様子を黙って見つめていたシリウスは、二人の表情を見てからかわれていることに気付くが、グツと堪えて柄を握る手に力を込めた。

叶流は、と言うとただただ顔を赤く染めて俯くことしか出来なかった。

「……と、いうわけだ。残念だったな」

シリウスの射抜くような視線を受け止めたアンティクレイア兵はたじろぎながらも、脳内で自分に与えられた命令を反芻すると落ち着くように一つ息を吐く。

「それでも構わない。乙女を渡せ」

なおも食い下がるアンティクレイア兵に、シリウスが面倒だとしても言いたげに長剣を上段で構えた。それに続き、テアもフィデスも緊張感を纏う。

「交渉決裂だ」

シリウスとテアが地面を蹴ると同時に、アンティクレイア兵が指笛を吹く。

辺りの木々から葉の擦れる音が聞こえて、更に十数人の兵士が出てきた。

今まで交渉をしていたアンティクレイア兵は司令官らしく、そいつを守るように兵士が出てくるものだから、シリウスもテアもそこで応戦するしかなく人数の多さに辟易した表情を浮かべていた。

「ったく！ 何人いやがる…っ！！」

そう言つて斬りつけること数人。

兵士は更に増えてくる。体力が少しずつ削られた状態で更に投入する兵士が増えれば、流石に皆が強くて歯が立たない。

叶流は周りの状況を見つめながら自分が何をすべきなのか、を考えていた。

どうやってこの戦況を切り抜けるか。

「……そうじゃないと…」

早々にこの戦況に決着は着く。

しかも、こちらが「負け」るのは確実だ。

多勢に無勢だとどうしようもない。

勝てなければ意味がない。弄られるようにシリウスやテア、フィデスが傷つくだけだ。

どうすれば、どうすればいい。そう思つて叶流が周りを見渡すと、

倒れている兵士の姿。その腰に小さなナイフを見つけたことが出来た。

叶流は意を決して、地面を蹴った。

この中での交渉材料は間違いなく、自分。

だから、「自分」を有効活用できる方法を叶流は選ぶ。

兵士の懷から拝借した小さなナイフを断りと共に手にすると、深く深呼吸をして一番目立つ戦闘の中心に向かって駆け出した。

「ちよっ！ カナルちゃん…っ！…？」

フィデスの声が背後から聞こえたけど、それを振り切って無我夢中で走る。

そして、シリウスの姿を見つけると刃を引いた瞬間を狙って彼の前に立った。

「な…っ…！」

お腹に力を入れ震える足を堪えると、斬りかかってくる兵士と剣を構えるシリウスの間に立ち、叶流は手元のナイフを自分の喉元に当てる。

「やめろっ…！」

司令官の声が響く。

目の前の刃は振り下ろされる前に、制止した。

「…ば、バカか…！ おまえは何やってるっ…！」

背後からシリウスの怒声が聞こえるが、叶流は司令官から視線を逸らすことをしなかった。

「…ったく！」

悪態をついたシリウスが、叶流の隣に並び、右を固めて剣を構えた。それにならってテアは左を固める。

叶流は二人に心の中で感謝すると、司令官に向かって口を開いた。

「やめてください」

「……何を仰ってるんですか？ 月の乙女」

「この場から、…引いてください…！」

「それは、我らについてきてくださるということですか…？」

「いいえ。私はあなた達の元には行きません」

「…でしたら…」

「引いていただけないのでしたら、私はここで死にます」

叶流の周りにいた者達全員が、息を飲んだ。

途端に戦闘とは違う慎重な緊張感が流れる。

「…それは、脅しですか…？」

「そう受け取って頂いても構いません」

「……」

「剣を、降ろしてください」

司令官は口を噤んだ。

叶流は一步も引くまい、とナイフを握る手に力を込めると、もう一度口を開いた。

「《剣を、降ろして》」

刹那。びくり、と身体が跳ねたと同時にアンティークレイア兵の手から次々と剣が落ちていく。

その異常な光景に、シリウスは驚いて叶流を見つめ、息を飲む。

漆黒の瞳が、真紅に染まっていた。

「…貴女、一体…！」

「《在るべきところへ、帰って》」

叶流のその言葉を最後に、地面に伏していたもの、戦闘意欲を出していたもの、司令官、全てのアンティークレイア兵がその場から忽然と消えた。

「…き、消えた…！？」

テアの驚く声が聞こえ、目の前の「敵」がいなくなるのを視認した叶流はもう大丈夫だと安心すると「良かった」と呟く。

「おいお前！」

シリウスは素早く剣を収め、叶流の肩に手を置いて自分の方に向かせる、彼女の瞳が真紅から漆黒に変わっていくのを目の当たりにした。

叶流はシリウスを見つめた途端に、へにやりと笑顔を見せる。

「……二人とも、だい、じょーぶ…、です、か…？」

「ああ。だから、…これを放せ」

ナイフを握る叶流の手に、シリウスの手が重ねられた。

緊迫した中であまりにも強く握り締めていたものだから、上手く力を抜くことが出来ない。まるで石のようになった自分の手を解すように、シリウスの手から体温が浸透してくる。

「…もう、大丈夫だ…」

ナイフの柄をシリウスがそっと広げた叶流の手の中から取り出すと、叶流は意識を手放した。

「あ、おい…！！」

足元から崩れるように倒れこんだ叶流を抱きしめるように、シリウスが支える。

すぐさまフィデスが叶流の手首を取り、脈の確認。シリウスはじつとフィデスの顔を見つめていた。

「…大丈夫。気を失ってるだけ」

フィデスの言葉にシリウスが安堵するように息をつくと、辺りを警戒していたテアが声を落として報告する。

「アンティクレイア兵の気配が全て消えた」

「…そうか」

気を失っている叶流を横抱きにしたシリウスは、叶流の顔を見つめながらぼつりと呟く。

「…言霊か…？」

「…ええ。…でも、少し音調が違うわ。言霊使いとは別種」

「それから、瞳が赤くなった」

「俺も見た」

「……言霊を扱う際に瞳が赤くなる”月の乙女”、か…。とんだ、拾い者だ」

シリウスがそう続けると、テアとフィデスはお互いの顔を見合わせた。

叶流の健やかな吐息だけが、辺りを包んでいる。

【 5 】

目を覚ますと、最初にみた丸い天蓋とは別に長方形の天蓋が見えた。

「……」

起き抜けの頭で上半身を起こすと、ベッドの上にいた。ふかふかのもこもこに包まれて眠っていたので、身体の調子はだいぶ良い。

いつ、朝になったんだろう？

寝ぼけ眼で朝日が差し込む窓を見つめると、ぐう、と、鳴るお腹。叶流は自分のお腹をさすりながら、ふかふかのベッドから足を下ろす。

「…腹が減っては戦はできぬ、ってこと…？」

寝ぼけながらもそんなことを口にしながら、靴下でぺたぺたと室内を歩いた。寝かせるときに靴だけは脱がせてくれたんだろう。

室内は広く、必要最低限の家具しか置いてない。叶流の眠っていた少し大きめなベッドが壁際の中央にあり右手にドア、左手には自分の身長よりも大きな窓と遮光カーテン。その前には、アンティーク調の丸テーブルにセットと思われる椅子が二脚。そういえば同じ椅子がベッドの傍にも置いてあった。

窓辺に立つと、朝日に輝く白いバルコニーが目に入る。

開くタイプらしく取っ手が二つ並んでいた。叶流が小さな門式の鍵を見つけて外すと、自然と窓が外側に開く。

途端に吹き抜ける爽やかな風と、身体を包む柔らかな朝日。

「…う、わあ…っ！！」

開かれた窓の先には、朝日に輝く外国の街並みのような景色が眼下に広がっていた。

思わず小走りになってバルコニーの手すりに掴まる。陽の光いっぱい空気を吸い込み、爪先立ちになってパノラマのような景色をぐるりと見渡した。

目線の先には水平線。上空の真つ青な青空と海の碧さに境が見えない。

見下ろした街並みは、白と蒼で統一されている世界。白い道に、白い壁。屋根は全てが蒼一色に染まっているので、まるで水面に沈んだ白い街のように見えた。

街は叶流のいる建物を中心に球状に広がっており、活気付いた人々が元気に外へ繰り出している。

その様子を上から見下ろしていた叶流は、はて、と首を傾げた。

「……ここ、なんでこんなに高いの？」

「王城だからな」

「おうじょう……？」

「ルナリア国の王族が住まう城のことだ」

返ってくるはずのない返答を数度やりとりした叶流は、はた、と気付く。

そして気付いた背後からの熱に、思わず顔が赤面した。

「し、し、シリウス……さ……!!」

背後からよき、つと顔を出してきたシリウスの横顔を視認した瞬間、叶流は身体を硬直させた。

昨日も感じていたが、こんな至近距離で男性と触れ合ったり、見つめたりするのは今までにない。すぐ離れようにも、左右をシリウスの両手で阻まれて動けないので叶流は逃げ場を塞がれていた。

「……どうした？」

「は、ははははは、離れてくださいー……!!」

顔を両手で覆って、バルコニーの手すりに俯いて叫ぶと更に後方から二つの笑い声が聞こえる。

「……仮眠とって戻ってきてみれば、何これ。スー、そんなに積極的だったっけ？」

「積極的だったのは昨夜だろう」

「そうね。一晩中カナルちゃんの傍にいたんだものね。あーもー、まったくもって微笑ましいわっ!!」

「…フィデス…」

一人でフィーバーしているフィデスに、隣のテアが呆れる声を上げている。

バルコニーの出入り口である窓辺からの二人の声に、シリウスはきょとんとした顔で向き直った。

身体ごとシリウスが離れたおかげで叶流は自由の身となるが、身体力が抜けてその場にずるずるとへたり込んでしまった。

朝から刺激的過ぎる。しかも、外で。

と、思いつつも、昨日は昨日で自分から男性二人に抱きつくという積極的な行為をしていたことに気付けない叶流だった。

「……」

当のシリウスは、テアとフィデスに何か言おうと口を開いたが背後にいる叶流が、ずるずるとへたり込む様を肩越しに見つめ、困ったように眉根を寄せていた。

「俺のせいかな？」

そんなシリウスの声に、テアとフィデスが揃えて首を縦に振ったのは言うまでもない。

そんな異世界生活二日目の朝。

シリウスは落ち着いた叶流を立たせると、部屋の中に戻った。窓辺に置いてある丸テーブルに座らせると、自身もその隣に座る。

そして、フィデスがワゴンの上に乗せていた料理を次々とテーブルの上に乗せていった。テアは、というと、お茶の準備。

そんな二人の手早い対応を前に、シリウスは叶流に昨日の経緯を話してくれた。

アンティクレイア兵達が忽然と自分達の前から姿を消した後、意識を失った叶流を連れて、ここ『ルナリア王国』に運んだ、と。

「それにしても、おまえのあの力はなんだ？」

「え？」

「…フィデスが言うには、音調は違うが言霊に近い力だそうだ」
そもそも、言霊ってなんだろう？

「あの、言霊ってなんなんですか…？」

叶流はふと浮かんだ疑問を口にする。

シリウスはそれを受け取って、ゆっくりと話し始めた。

「言霊、というのは言葉に宿る不思議な力の事だ。それを、能力者が使つと発した言葉通りの結果を現すことが出来る。ただし、この力は諸刃の剣だ。能力のある人間が使えば簡単に人すら殺せる。…だから、この能力は一般には知られていない。言霊使い、という職種も王宮付きでなければならない」

「……それを、私が、使っていた…？」

「近い力を、な」

カップに注がれたコップを口に運びながら、シリウスは言った。

「それはライジェル様が帰られたときにでもして、今は朝ご飯」

そう言つて、フィデスが叶流の前に最後の皿を置いた。

叶流は目の前に並べられた料理に絶句する。瑞々しいフルーツの盛り合わせから、とろとろのポタージュ、ふわふわのフレンチトーストには蜂蜜がかかっており実に美味しそうに輝いていた。

他にも色とりどりのサラダや香ばしいソーセージも添えられており、難しく考えていたことが全部吹っ飛んだ叶流の空腹は頂点を迎える。

「こ、これ…、食べて良いんです、か…？」

「何のために用意したと思つてる…」

「いいのよ。カナルちゃん！ 私達はもう食べ終わったから、あなたはしっかり食べて」

シリウスからの言葉に啞然としている叶流に、フィデスが慌てて付け加えた。

フィデスの笑みに背中を押される形で、叶流は恐る恐るスプーンを手にする。

「大丈夫だ。毒は入ってない」

「！？」

「スー！ なんつてこと言うの…！」

「フィ、フィデスさん！大丈夫です！気にしてませんからっ！！」
そんな慌しい朝食に、叶流は心がうきうきするのを感じた。こんなに賑やかな朝食は何年ぶりだろう、と。

スプーンを手にしてポタージュをそつと掬う。とろとろで暖かい。口の中に入れると、空腹な胃にゆつたりと染み渡る。そう言えば一昨日から何も食べてない。叶流は先に消化の良いものを口に運ぶのが得策だと思い、ほんのり甘みのあるポタージュを少しずつ口の中に入れていった。

そんな叶流の食事を見つめながら、「食事中に申し訳ないが」と断りを入れたシリウスが言葉を続けた。

「あんたに会わせるはずの予定だった人間だが、現在間男中らしい」
「ま、まあと、…こ？」

「簡単に言えば、人妻と遊んでるってこーと」

「ひ、人妻と遊んでるっ…！？」

「フィデス…、あまりライの立場を悪くするな…」

「だってー、本当のことでしょ？」

「仮にもお仕えしている方なんだから、言葉には気をつける」

「……はい」

テアから手厳しい言葉を受けたフィデスが、犬のようにしゅんとなる。その様子を見ながら、叶流は着実にポタージュを口の中に運んでいった。

「申し訳ないが、ライジェルが帰ってくるまでしばらくここに留まつてもらう。構わないか…？」

「はい。私、シリウスさんたちを信じるって、決めましたから」

笑顔で即答する叶流を見つめて、シリウスの口元が緩んだ。

「そうか。じゃあ、この部屋を好きに使ってくれ」

「はい」

「ライジェルが帰ってきたら色々と聞かせてもらうことになる。それまでは俺達であんたのガードをする」

「わかりました。…天川叶流です。改めてよろしくお願いします」

ポタージュを掬っていたスプーンを置いて、行儀良くぺこりと頭を下げる。

「……シリウスだ。改めて、よろしく」

「はい、シリウスさん」

「さんは付けるな。…呼び捨てで良い」

するとシリウスは次に、控えるように自分の傍にいたテアを示した。

「自己紹介はしてなかったが、テア・ラクリモサだ。よろしく」

「知ってるかもしれないけど、私も自己紹介。フィデス・アリアドネ。よろしくね、ルーちゃん」

「る、るーちゃん!？」

「そう。シリウスは、スーでしょ？ で、カナルちゃんは、ルーちゃん! どうかな？」

「え!？ えっと…、あの…、は、…はい、大丈夫…、です…」

「あら、顔まで真っ赤。可愛い!。ルーちゃん!」

叶流の真向かいでいやんいやんと身体をくねらせているフィデスに、シリウスが呆れるように口を開いた。

「何かあつたらフィデスと呼ぶと良い。同性同士何かと都合が良いだろう?」

「あ、はい」

それ以降は、ポタージュを平らげるともうお腹いっぱいになってしまった。

四食は確実に抜けている。その分胃が小さくなってるのだから、胃痙攣を起こす前に叶流は申し訳なさそうにスプーンを置いた。

「…どうしたの? ルーちゃん」

「え、と…、あの…」

「もう食べれない?」

フィデスの言葉に、素直に首を縦にふるとフィデスがにっこりと微笑む。

「そっか。解った。いいのよ無理しなくても」

「あの、でも、お昼に食べたいと思うので別に包んでもらっても良いですか…?」

叶流からの申し出に、三人の顔がきよんとする。

思わず身を引いてしまいそうになるが、叶流はせつかくのご飯だから、と思ったことを口にした。

「せつかく作って頂いたんです。残すのは申し訳ないし、もったいないじゃないですか。フレンチトーストやソーセージだったらお弁当になるかな、と、…思っ…」

おかしいことを言ってるのかな?それともこの世界には「お弁当」という習慣がないのでは?

と、一人ぐるぐる悩んでいる叶流を他所に、三人は各々優しい笑みを浮かべた。

「じゃあルーちゃん、このお弁当持って街へ出ましょうか」

「…街?」

「ルーちゃん、さつき楽しそうに見ていたでしょう?」

その言葉に当てはまるのは、きっとバルコニーで街を見下ろしていた時のことだろう。

それが「楽しそう」に見えていたとは思ってもみなかった叶流は、目をぱちくりさせた。

「ね、スー。良いでしょ?」

「ちゃんとフィデスが面倒みるならな」

「そんな拾ってきた動物みたいな言い方しないでよ。スーの意地悪」
そこから再びシリウスとフィデスの仲良し(?)な言葉のキャッチボールが始まったので、叶流がおろおろとその様子を見てみると、呆れるように見ていたテアと目が合う。

テアは少し困ったように眉根を寄せ、シリウスの肩を叩いて「そろそろやめろ」と合図を送った。

その合図に二人は舌戦を止めると、フィデスは街に出る準備をすると行つて朝食を載せたワゴンを押して部屋から出て行き、叶流はテアからお茶を注いでもらう。

微妙な空気が残る室内には、叶流とシリウスとテアの三人。

叶流はちびりちびりと飲んでいた食後の蜂蜜茶を飲みながら、空気を探っていた。

蜂蜜茶というのは、ルナリア王国の特産らしい。テアが軽く説明をしてくれた。

「……」

奇妙な時間だけが過ぎていくと、準備の終わったフィデスがお弁当二つぶら下げてドアからひよっこり顔を出す。

「スー？ 行つて来るね」

「気をつけてな」

「大丈夫！ 何かあつたらすぐ連絡するから！」

「フィデスの大丈夫は半分あてにならん」

シリウスの言葉など右から左に受け流したフィデスは、叶流に手招きする。

「ルーちゃん、ほら、行くよー！」

「え、あ……！」

叶流は手にしていたカップをソーサーに置いて、フィデスのいるドアに向かって走り寄るとその手前で突然止まった。

「どうした？」

そして、くるりと振り返って未だお茶を飲んでいるシリウスとテアに向かって叶流はぺこりと頭を下げる。

「朝ご飯、とても美味しかったです。ありがとうございます。それから、いつてきます！」

それだけ伝えると、叶流はフィデスの後を追うように部屋から出て行った。

閉じられたドアを呆然と見つめながら、シリウスは隣で座るテアに真剣な面持ちで言葉をかける。

「……どう思つ？」

「昨日、フィデスにも聞かれましたが、答えは変わりません。暫く様子を見ます」

「そうか…」

「シリウスは？」

テアからの言葉に逡巡したシリウスは、手元のカップを見つめながら口を開いた。

「…敵、ではない、…と、思いたい…。俺たちを信じてくれるあいつを、俺も信じたい」

「…そうだな」

テアはシリウスの頭を大きな手で撫でた。

叶流とフィデスが王城から出ると人のいる広場に向かって駆け出した。

フィデスはさすが王城に勤めているだけあって、門兵とも顔見知りらしくすんなり城から出ることが出来た。

「…うわ…」

叶流は城に出て堀に囲まれた真っ白な城を見上げると、その大きさに驚いた。

思わずぼかんと王城を見上げていたらフィデスに腕を取られる。街に出る前に、これ、渡しておくね」

フィデスが、満面の笑みで叶流に白のカーディガンを渡してきた。それは、昨日シリウスが眠っていたときに叶流がかけたものだ。

「あ、これ…」

「寝てるシリウスに上着をかけてくれて、ありがとう」

「と、とんでもない…!!」

丁寧にお礼を言われて、叶流は片手でぶんぶん手を左右に振る。「私も、テアも嬉しかったのよ」

慌てた叶流にフィデスが穏やかな表情で応える。

叶流もまた笑みを返していた。

「よし！ それじゃあ街に行くわよー！」

「はわわっ……!!」

元気に走り回るフィデスに連れられ、白のカーディガンを着た叶流は騒がしい買い物広場へとやってきた。

街に出ると人々が着ている服装はスーツではなかった。黒スーツを着ているのは、城内にいた警護を担当としている人間だけらしい。一般人は女性はぼんちよみたいに全身を包み、童話の「あかずきん」ちゃんがいるように見えた。男性は普通にシャツと布の履物、といったシンプルな様相だ。

市場を見て回っていると色とりどりの布で扱っている品物が分かれていくらしく、思わず観察。赤が肉屋、黄色が果物、緑が野菜、茶色が雑貨屋みたいに食品以外で何でも取り揃えているところ、ピンクが服屋。そんな活気で溢れている人々の中で、お店を見ているだけでもわくわくする。

「……あれ？」

でも、たった一つ。「白い」布を掲げている品物だけが解らない。

叶流は楽しそうに前を歩くフィデスの手を引いた。

「ねえ、フィデスさん」

「んー？」

そう言っただけ振り返ったフィデスはいつの間にも買ったんだろう瑞々しい果物（たぶん、林檎だろう）を手にしており、しゃくしゃくと咀嚼していた。

「あのお店……」

「……ああ、つがい屋？」

叶流の意図を汲んだフィデスが、答える。

「……つがい、や……？」

そう言えば、昨日もシリウスが”つがいの色が珍しいのか？”と聞いてきた記憶があった。

そして、自分の記憶が正しければ祖母から託されたペンダントも”つがい”だと聞かされた気がする。

確かに店先で白い布の上で並べられているのは、叶流やシリウス

がしていたペンダントに似ているようなものばかり。

叶流が不思議そうにそれを眺めていると、最後の一欠けらを口に放りこんだフィデスが、”つがい”について説明してくれた。

「つがい屋っていうのはね、”つがい”作りを生業にしているの」

「つがいって、あれのことですか…？」

水晶球の中に、窪みの球体があるペンダントを示した。

店先で並べられているものは、窪んでいる球体が全て同じ色や形をせず、窪んでいる場所も色も違う。

その中には叶流が持っているように七色に光るものなど一つとしてなかった。

「この世界にはね、”魂のつがいを見つける者は、世界の幸福を手に入れる”っていうふるーい言い伝えがあるの」

「…世界の幸福？」

「ええ。嘘か真か、私は知らないんだけどあの”つがい”には魂の片割れがいるみたいなのよね」

「へー」

「まあでも今じゃ、言い伝えよりも成人のお祝いに親から受け継がれる、一種の成人の証のようなものになってるんだけどね」

「…成人の証…」

「そ。この世界じゃ、16歳になると成人としてみなされるのよ。だからみんな16歳になったら”つがい”を受け継ぐの。…お守り代わりに結婚するとき新しく買う、っていうのも最近の流行みたいなんだけどねー」

まるで他人事のように話すフィデスに、叶流は祖母とのやり取りを思い出していた。

この”つがい”を受け取った、あの一年前の日を。

「最近の流行で商売する偽者が増えたから、どれが本物のつがい屋かわからないんだけど、とても大事にされてきたものよ」

「……」

「ルーちゃん？」

「……」

「ルーちゃんってば！」

「えっ！？ あ、はいっ」

「…どうしたの？ ぼーっとして…？？ あ、疲れちゃった？」

「あ、いえ、あの…っ」

「そろそろお昼だし、広場で噴水見ながら食事にしましょうか。話の続きもそこで」

嬉しそうに叶流の手を引いたフィデスは、人の波を縫うように広場に向かって歩いて行った。叶流は祖母との思い出を記憶の引き出しからそつと開けて、思い返す。

祖母は、自分の郷里で言うところの16歳、成人の「前祝」としてこの「つがい」を手渡してくれた。

そして、音楽室で出会ったユスという巫女は祖母と郷里を共にして、この「つがい」の存在を知っていた。

薄々感じていた予感が「事実」に変わる。

ここは、祖母の郷里。祖母は、この世界の人間。

本来なら驚く事実のはずなのに、不思議と胸にすんと、と落ちる。納得する、といった表現が正しいだろう。叶流から見ても祖母はどこか「普通」じゃなかった。そしてそれを自分だけが知っている。

一つ一つ繋がりを確認するように頭の中でピースを集めていくと、ある事実に突き当たった。

この世界の出身である祖母の血が、自分にも流れているという事実。

もしかして、祖母は未来が視えていた…？

「はい、到着」

フィデスの快活な声で我に返ると、水が噴き上がる噴水広場に出た。

噴水を囲んでベンチが置いてあったり、噴水を見ながら腰掛けて

ランチをしている人たちを見かける。フィデスも叶流を連れて同じように腰をかけた。

「はい、これルーちゃんの分ね」

「あ、ありがとうございます」

「ちよつとシエフに頼んで、サンドイッチみたいにしてもらったの。その方が食べやすいでしょう？」

嬉しそうに布の包みを開けると、今朝のフレンチトーストで卵やレタス、そして肉厚なベーコンなどが挟んであった。

色とりどりの具材を見ていたら急にお腹が減ってきた。隣ではフィデスが美味しそうにサンドイッチを口に運んでいるので、叶流もならうようにサンドイッチにかぶりついた。

蜂蜜の甘さに負けじとパンチの効いたソースが卵やベーコンの味を際立たせる。

某ファーストフードのマフィンみたいな感覚で美味しく味わえた。「で、さっきの続きね」

話を続けようとした隣のフィデスを見つめると、彼女はもう食べ終わったようにソースで汚れた指を舌で舐めとっていた。

早い。食べるのが早い。驚いて目を剥いた叶流に、フィデスがくすりと笑い「ルーちゃんはゆっくりで良いからね」と前置きをしてから話を続けた。

「私も”つがい”を持ってるんだけど…っ」と

そう言つて、フィデスが胸元から鎖を引き上げると、叶流のものと少し小さい”つがい”が出てきた。

水晶球の中の色は、 橙。

フィデスにぴったりの色だと、叶流は思った。

「この中の色はみんな違うの。誰一人として、同じ色は持たない。…いいえ、持てないの」

「…っん、持てないんですか？」

「そ。今は偽者のつがい屋もいて同じ色が出回ってる場合もあるんだけど、本来は誰一人として同じ色が持てないようになってる。…」

私も、どうやってこの”つがい”を作り出すのかは知らないんだけど、そう聞いている」

「……」

「私の”つがい”は母からのものなの。母は魂の片割れを見つけたことが出来なかった。それでも父と会って、幸せの中私を産んだ。母は私に魂の片割れが見付かると良いわね、っていつも言ってくれた。……”つがい”は持つ者によって魂の片割れを見つける。だから、親から子へ渡されても親と同じ魂の片割れを探すことはないの。所有者の魂と共鳴して、片割れを探すようになってる」

大事に”つがい”を抱きしめながら、フィデスは言った。

彼女の表情、言葉、仕草からこの”つがい”がこの世界でとても大事にされ、尊ばれている存在だということに気付いた叶流は、祖母から託された”つがい”の意味を考える。

どうしてそんな大事なものを自分なんかに託したのか、と。

「実際に魂の片割れを見つけた人を見たことがないから、世界の幸福、とか言われてもピンとこないんだけどね」

「でも、…素敵ですよ。まるで赤い糸みたい」

「あかいいと？」

「私の世界では、自分の小指には必ず運命の赤い糸の相手がいる、って言われてるんですよ」

「…見えるの？」

「いいえ。見えません」

まじまじとフィデスが叶流の小指を見つめるので、叶流は口元に笑みを浮かべて正直に伝えた。

フィデスは目を丸くして叶流を見つめると、「見えるのかと思っただ！」と真剣に言ってくるので、思わずふき出してしまった。

それから、フィデスは叶流がサンドイッチを食べ終わるまで、シリウスのことを少し話してくれた。

「シリウスって、ちょっと不器用なだけで、本当は凄く優しいやつなのよ？ 初めて会った時も、銃の照準を貴女に狙っていたの

にわざと抱きしめるようなこととしてトリガーを引き難くしたの」

そう言われてはた、と気付く。

あの時シリウスは、「殺されなくなかったら大人しくしている」と言って抱きしめてきた。それは、フィデスが叶流を狙っているのを知っていたから、わざとあ言っただ。

「それからさっきだって、わざと怖がるようなこと言ってるけど、あれでも気を遣ってるつもりなのよ？ あの子」

フィデスの顔に苦笑が滲む。その表情は「姉」そのものだ。

こうしてシリウスのさり気ないフォローをしているところを見ると、本当にシリウスのことを大事にしているんだな、というのが伝わってきて、心がほっこりする。

その他にもフィデスは少しずつだけれどこの世界のことを少し教えてくれた。手始めにこの国 ルナリア国 のこと。

この国では王族が政を行っていて、この世界の中心を担っている心臓とも言うべき大国だってこと。この国がなくなったら諸外国の経済もままならないってぐらいの影響力を持っていること。

そんな話を聞いていたらすっかりサンドイッチも食べ終わり、お腹が満足した。

「…ふぁー、お腹いっぱいですー」

「うん、良く食べきました。じゃ、ちょっと飲み物買ってくるからここで待ってるのよ？」

そう言って、頭を撫でてくれたフィデスに、思わず笑みが零れた。温かなぬくもり。それは祖母が亡くなって以来、同性からは初めてのものだ。

心の中がくすぐったくなる。

「はあい。フィデスさん気をつけてくださいねー」

「はいはい」

フィデスは元気の良い笑顔だけを残して、身軽な足取りで人ごみの中を駆け抜けていく。

その身のこなしから、やっぱりただの女性ではないんだというこ

とは容易に理解出来た。訓練されているからこそ出来るしなやかな動きに、叶流はその背をしばし眺めていた。

すると、突然視界を遮られたので顔を上げた。

そこには、身長の高い男性。

鈍色をした天然パーマの長髪を無造作にまとめ、少し垂れた栗色の瞳からは妖艶な空気が感じ取れる。

昨日襲い掛かってきた人たちとは違う服装だし、周りの人に溶け込むような格好をしているので殺気も感じないことから別に悪い人でもなさそうだ。と、警戒を解いた。

「……あのー……？」

「アタシを助けて欲しいの」

「……はい？」

男性としては少し矛盾を感じる一人称と言葉遣いに、矛盾を感じるまま叶流は目の前の人物を食い入るように見つめた。

【 6 】

「シリウス!!」

強張ったテアの言葉に、噴水広場で報告を待っていたシリウスは即座に反応を返した。

「いたか!？」

「いや…」

普段は冷静なテアが少なからず動揺しているのが伺え、シリウスに焦りだけが募った。

思わず唇を噛む。

今日はいつものようにテアと一緒に剣の稽古をつけてもらっていた。稽古開始時間が遅かったからか、気付けば空が夕焼け色に染まっていた。夢中で稽古をしていたシリウスとテアは、もう叶流とフィデスが戻っているだろうことを予測して叶流の部屋を訪れた。

しかし、そこは朝シリウスとテアが出て行ったときのまま。

がらんとした部屋と、夕闇色に染まっていく空を窓越しに見つめ、シリウスとテアはその場から駆け出した。

こんな時間帯まで戻らないというのは明らかにおかしい。しかも、フィデスがついているんだ。

それならばなおさら。

フィデスはシリウスの信頼のおける仲間の一人だ。

その彼女がてこずるような敵であれば、国家レベルで敵の侵入を備えなければいけない。それこそすぐに間男中のライジエルの居場所を突き止め、その首根っこ引っ搦んででもやらなければならない緊急事態だ。

シリウスは、「落ち着け」と何度も心の中で唱える。

あまり国民に不安を与えてはいけなのを承知しているシリウスは、テアと二人だけで叶流とフィデスの搜索に当たっていた。

「…どこだ…、どこに行った…っ!」

家路につく者と、商売をする者とでこつた返しているため広間は
大勢の人間で入り乱れていた

そんな喧騒の中、テアは顔色を変えずに飛び回っている。逆にシリウスは二人の行動パターンを考えていた。

それでも一通り探して見付からない苛立ちが、徐々に身体から滲み出る。

「なぜ、いない…っ」

ぎりり、と噛み合わせた奥歯が軋んだ。

「ねえ」

ふ、とスーツの上着の裾を掴まれたので、シリウスは苛立ちを抑えて掴まれた先を見下ろす。

そこには、小さな男の子がきょとんとした顔で立っていた。

周りの大人たちでさえシリウスの尋常じゃない苛立ちを感じて近寄ってこなかったのに、この男の子は母親の制止を振り切ってきたんだろう。少年の奥に顔を真っ青にした母親が立っていた。

シリウスは、一度眉間の皺を伸ばして嘆息すると、無垢な瞳で見上げる少年に視線を合わせるために腰を降ろした。

「どうした？」

「…ねえ、お兄ちゃん達天使様を捜しているの？」

「天使様…？」

「うん。髪の毛が長くて、ひらりひらり宙を舞ってたの。でも、不思議なんだよ。天使様は白いお洋服じゃなくって、真っ黒いお洋服を着ていたの」

少年の言葉に、シリウスが一旦戻ってきたテアを見上げる。

「聞いてたか？」

「いや」

「髪の毛が長くて、ひらりひらり宙を舞う黒い服を着た天使を見たらしい」

その特徴を聴いた瞬間、テアの瞳が大きく見開かれた。

フィデスだ。

目眼でお互いの考えを交換すると、シリウスは少年に向き直る。

「何処に行ったか解るか？」

彼から聞いた特徴はフィデスのものと、ほぼと言っていいほど合致している。もしかしたらもしかするかもしれない。

次第と状況が飲み込めたシリウスに、少年の言葉は希望を持たせた。

「うん、あのね、もう一人のおねえちゃんと一緒にあっちの方に行つたのを覚えてるよ！」

ありがたい。二人一緒だ。

「九番館だ！！」

シリウスは見上げたテアに向かって指示を出すと、彼は即座に地を蹴った。

それからシリウスは得意げな顔で満面の笑みを浮かべている少年の頭を笑顔でぐりぐりと撫でてやる。

「教えてくれてありがとう。助かった」

「えへ、どうしたしまして！」

につこり微笑んだ少年にシリウスの笑みも深くなった。

シリウスはその場で立ち上がり、もう一度少年にお礼を言つと、テアの背中を追うようにして駆け出した。

ルナリア国の中央市場の端の方には備蓄倉庫がある。

一番館から四番館までが食料。災害時にここで備蓄した食糧を国民達に配給する為のものだ。

五番館から七番館までは主に武器庫。とはいえ、ここを一気に叩き潰されたら終わりなので、主に置いてあるのは防具や刃物などの直接使用するものになる。むしろ、これは民衆用と言っても過言ではない。

王城で蓄えているものの中には砲弾や火薬類の武器が多く、もし何かあった場合は民衆にも武器を開放する気にいる。

己の身は己で守る、という自己責任の下その武器庫は開放されることになっていた。

残った八番館から九番館は倉庫として使われたり、人が住めるようになっていて。主に旅人が使用することが多い。

宿泊には許可がいるが、旅人の中でも「ならず者」と呼ばれる者や「山賊」を生業としている場合もまれに多く、女子供には不用意に近付くな、とお触れを出していた。

そんな九番館に叶流とフィデスが連れられたとなると、テアもシリウスの足も自然と速くなった。そして。

つんざくような悲鳴が上がる。

背筋を何か冷たいものが流れて、シリウスは呆然と倉庫の入り口で立ち尽くしているテアに追いついた。

遅かったか…！

そう思いながら、倉庫扉に手を掛け、中に入ろうとした
「どうした…っ…！」

刹那。

「
カット」

緊迫したシリウスの声に、よくも邪魔してくれたわね、と言わんばかりの冷ややかな声がかかる。

次いで、間の抜けた声に思わずシリウスは頂垂れた。

「ええええええ…！！？　なんでよおう！　今のは良い感じだと思ったのに…！！」

「だめ、全っ然ダメ。邪魔も入られちゃったし、あんた全然緊張感足りないのよっ！」

倉庫の奥から聞こえてくるフィデスと女言葉の男の声のやり取りに、自然とシリウスの額に青筋が立つ。

「あ、でもカナルちゃんは、大丈夫よー。もうね、すごいすごい可愛かったからあー」

「…あ、ありがと、う…ございます…っ」

まるで甘えるような声で叶流を褒めると、男は次に倉庫の扉で怒りをふつふつと滾らせているシリウスとテアに向き合った。

「で？ あんた達は？ カナルちゃんや、フィデスちゃんのお友達？」

「……まあ、そんなものだ」

項垂れているシリウスを横目で見たテアが、オネエ言葉を使う男オカマ に向かってそれとなく返事を返した。

「あらそう。アタシはシノン。この九番館倉庫を借りて、少しばかりお芝居の練習をしているの」

「…はあ」

「それで、二人のイメージにぴったりの役があったから少しばかりお手伝いしてもらっていたんだけど…」

オカマ、いや、シノンはそう言ってテアの表情と未だ項垂れたままのシリウスを交互に見つめて、首を傾げた。

「もしかして、心配かけた？」

当然だ。

面と向かって言ってやりたい気持ちを抑えて、シリウスは扉を掴む手に力をこめるだけでその衝動を堪える。

そして項垂れていた頭を思い切り振り上げて、シリウスは中の様子を伺った。

汚い布の上で叶流がちよこんと大人しく座っており、その前でフィデスが両手を顔に当てて止まり、その二人を手前で見ているオネエ言葉を使う鈍色にびいろをした長髪を無造作に縛っているタレ目のオカマ。そして、その様子を周りで伺っているギャラリィ！。

二人の生死を心配していたシリウスにとって、目の前の状況は想定外な出来事だ。それを目の前にして、よく自分の怒りが爆発しなかったと褒めてやりたい。

そんなシリウスに、更に追い討ちをかける一言がフィデスから放たれる。

「もー、スーったら邪魔しないでよ!」

……………ぷちっ。

「…い、い加減に…、しろおー……!」

フィデスの何気ない一言でさすがにキレたシリウスの叫び声が、いつまでも九番館に響いていた。

* * * * *

「あんた、今の自分の立場ちゃんと解ってるんだろうな…?」
ところかわってここはルナリア王城の叶流に宛がわれた一室。
そこではテアとシリウスが、ベッドに座る叶流に向かって冷やかな視線と言葉を浴びせていた。

その傍ではいたたまれないような様子で、フィデスが見守っている。

「……………ごめんなさい……」

「そもそもなあ、知らない人間にひよいひよい着いていくなんてガキみたいなことをするな。ちゃんと自分の行動に責任を持て」

「…はい」

叶流は俯いたまま、シリウスからの言葉を素直に受け止めていた。まさか心配されるとは思わなくて、完全に時間を失念してシノン

達と芝居の稽古に付き合い、言葉通り明け暮れた。

「ま、まあ、スー？　そこまで言わなくても…」

たまりかねたフィデスが助け舟を出すつもりで口を挟むと、シリウスとテアの視線がフィデスに向かう。

叶流はしまった、やばい、と臍を噛んだ。そもそも、悪いのは自分だ。フィデスに非はない。

しかし、口を開いたのは意外にもシリウスではなくて、今までずっと黙っていたテアの方だった。

「そもそも、お前がついていながらどうしてこんな事態になったんだ…！！」

まるで咆哮をあげるように声を張り上げたテアに、フィデスが一瞬で硬直する。

「は、はいっ…！」

「俺たちはガードをしてるんだ、ガードを！　それなのに一緒になつて遊んで…、職務怠慢だと思わないのか！」

「すみませんっ…！」

思い切り頭を下げて謝るフィデスに、叶流は慌てて立ち上がる。

「…っフィデスさんは、悪くないんです…！」

思わず声を張り上げた叶流を、シリウスとテアが見つめ、フィデスもまた驚いたように叶流の顔を見つめていた。

「私が、フィデスさんをお願いして連れて行ってもらったんです。だから、責めるなら私だけを責めてください、お願いします」

思い切り頭を下げて、シリウスとテアをお願いする。自分が出来ることはそれぐらいだ。

それに、怒られることには慣れている。どんなに理不尽なことで怒られようとも、詰られようとも、耐えられる。

「…カナル様、頭を上げてください…」

テアからの思った以上に優しい声に、肩を震わせるとテアは真剣な表情で叶流の前に立っていた。

「…はい」

「良いですか？ 何かあってからじゃ、遅いんです」

「…はい」

「あなたは、フィデスを見殺しにしたいんですか？」

テアの一言にはじけるように顔を上げる。

テアの茶色の瞳は、じつと叶流の瞳を覗きこんでいた。

「今回、あなた達がいた場所というのは質の悪いゴロツキがたくさんいる危険区域なんです」

「…え？」

「フィデスはそれを知っていました。なぜ、知っていて一緒に着いていったと思いますか？」

叶流はフィデスを見つめる。フィデスは慌てたように顔を背けてしまった。

もしかして、何かあっても一人で守るため？

そんなことが浮かんだ。青い顔で自分を見上げる叶流の瞳から、なんとなく言いたいことが解ったテアはゆっくりと口を開けた。

「フィデスは私達の大事な仲間です。普通の女よりもよっぽど強いでしょう。…でも、多勢に無勢だったらどうします？」

「き、昨日みたいに…、なり、ます…」

「そうですね」

「その時は、私を守らなくて結構です！！」

「でも、シリウスは言ったでしょう？ あなたのガードは自分達です、と」

「……はい」

「どんなことがあっても守る。それが、俺達の責任です」

「…私なんか」

「……」

「私なんか、…見殺しにして頂いて構いません」

ぽつり、零した叶流の闇に、周りの空気が剣呑とした。

「私は、自分の世界でいらない存在でした。誰にも必要としてもらえない人間です。…それは世界が変わっても同じことです。私は、

私のせいで誰かが犠牲になるのなんて、耐えられません。だから、せめて私は誰かの役に立って死にたい……！」

乾いた音と共に、頬に激しい痛みと熱が走った。

視界がぶれて、視線が真横になる。最初は何が起きたのか良く解らなかった。頬の熱さを自分の手で感じて、初めて「叩かれた」ことを知る。

「それは私が許さない」

冷静な声からは、小さな怒りを感じた。

叶流がフィデスの方を見つめると、彼女は強い視線をこちらに向けていた。

「私は自分の仕事に誇りを持ってる。何があっても私はあなたを守るし、絶対に見殺しになんかしない」

「でも、私なんか守って、それでフィデスさんが死んじやったりしたら……！！」

「失礼なこと言わないで。私は、死なない」

そうは言っても「多勢に無勢」だったら？

その言葉を聞いて昨日の戦闘を思い浮かべればすぐに解る。彼らは「プロ」だ。仕事に誇りと責任を持っている。そんな彼等があの戦闘中自分達の「最後」が解らないわけがない。「負ける」ことを理解した上で、最後まで戦う姿勢を崩さなかった。

それは無謀というべき愚行。

けれど、叶流を最後まで守るためには最良の方法だったのかもしれない。

「そんな……、そんな嘘言わないでくださいっ！」

「嘘じゃないわ。私も、あなたもどちらかが欠けることを、私の主人は良しとしない」

「え……？」

「だから私は生きるの。主人の為にこの命費やす時まで、あなたを守ると決めた主人に従う」

「……」

「その覚悟があつて、今日はカナルちゃんと一緒に九番館まで行ったのよ」

そんな覚悟いらない。

誰かの犠牲の上に立つ自分の命を許せるほど、叶流は自分の命を軽んじていた。

だから。

「…もう、やめてください…。みなさん、私を守らないでください…」

両手で顔を覆った。もう何も見たくない、何も聞きたくない。

こんなに優しい人たちに囲まれて、たった二日一緒にいただけなのに、見えなかった。

彼らはいつでも「死」を覚悟できる場所において、そんな彼等に自分を守られていた。

気軽に考えたらいけないんだ。誰かと一緒にいる、ということ。

そこに付きまとう「覚悟」をしつかり見ていかないといけない。

今までずっと一人だったから、自分はそういう部分への考えが至らないということに気付いた。

「そこまでだ」

静寂を破ったのは、シリウスの静かな一言だ。

「…お互い頭を冷やす必要がある。テアはフィデスを頼む」

「……」

「フィデス、解ったな？」

黙ったフィデスは、小さく頷くとテアと一緒に部屋を出て行った。シリウスは二人が部屋から出て行くのを見届けてから、両手で顔を覆って立ち尽くしている叶流に向き直る。

「……」

びくともしない叶流を見つめて、シリウスは嘆息を漏らして叶流

の傍まで近寄ると、

「失礼」

「っ!？」

断りを入れて、ふわりと叶流をお姫様抱っこで抱え上げた。

身体を硬くする叶流をなだめるように「ベッドに運ぶだけだ」と
呟くと、その言葉通りベッドの上に下ろす。

「……落ち着くまで、傍にいてやる」

頑なに両手で顔を覆う叶流の前髪をどかすシリウスの手つきは、
とても優しかった。

「……泣けるか？」

彼からの言葉に、首を横に振ると、「そうだよな」と言葉を返さ
れた。

「俺も、お前の気持ちは良く解る。命を掛けてまで守られるってい
うのは、守られる方としてはとても心苦しいよな」

「……」

「だからって、自分の命と他人の命を秤にかけてはいけない。それ
は、生に対する冒瀆だ」

ゆっくりゆっくり、噛んで含めるような言い方に、叶流も次第に
強張らせていた身体から力を抜いた。

「テアは、裏切った仲間を斬った」

「……」

「フィデスは、家族を目の前で亡くした」

「……」

「……大事な者を喪うってことは、それだけ命を尊ぶということだ。
だから、あまりあいつらの前で”いない存在”だなんて言うな」
困惑気味な苦笑が聞こえた。

叶流は覆っていた両手を退かして、シリウスを見上げる。彼の傷
ついたような苦笑に、叶流は自分の胸が痛んだ。

「……ごめん、な、さい……」

「それは俺じゃなくて、あいつらに言ってやれ」

それでも返事を返さない叶流を見て、シリウスは「しょうがないヤツだな」と言うと、もう一言付け加えた。

「あいつらはあいつらで、結構おまえのことを気に入ってる。…それだけは解ってやれ」

「……」

「おまえは少し、自分に対して優しくすることを覚えた方が良くない。きょんとした顔をした叶流に、シリウスはそう言って笑んでみせると、叶流を布団の中に押しやった。

「寝付くまで傍にいるから、もう休め」

こくり、小さく頷いた叶流はぎこちなく撫でる大きな手の温もりを感じながら、気付けばうとうとと眠りの淵を彷徨っていた。

撫でられる安堵感を受けて、次第に意識が深く深く落ちていった。

その様子を闇夜に紛れ、窓の外から見つめる怪しげな二つの小さな光。

何かを確認するとその場から離れる。

「 見つけた」

男が暗闇の中で意識を手繰り寄せると、夜露の香りから一変してかび臭い室内に変わった。

先ほどまで見ていた映像を脳内で再生して、しっかりと顔を覚える。

その作業をしている男に、若い男の声がかかった。

「任務完了です」

「どうだった？」

「少し抵抗されましたが、手駒の準備は整いました」

「ご苦労。合図があるまで待機だ」

「御意」

さて、と言うなり男は至極楽しそうに口元を歪めた。

「 待っている、 ” 月の乙女 ” … 」

【 7 】

「いつまで寝てるの」

布団を無理やり剥がされ、幸せに過ごしている夢の中から現実に取り戻す冷たい一言が落ちる。

寝ぼけ眼で見た窓の外は暗い、捲られた布団がなくなること冷氣が叶流の身体を眠りから覚ました。

あまりの寒さで飛び起きるように上半身を起こすと、布団を捲り上げていた叔母の手から布団が落ちた。

「朝食の準備からだよ」

端的に命令すると、寝巻き上に温かなガウンを着ている彼女はさっさと部屋から出て行く。

叶流は頭をぽりぽりとかいて、いつもの使い古されたベッドから降りた。床は冷たい。薄いパジャマ越しに冷えゆく身体を抱きしめた。

いつも目を覚ましたくない、と思っていた。

叔母の声が嫌いだ。

それでもこの声に従わないといつまでも言い続けて、しまいには朝食にありつけない。あまりに酷いと身体にきいてくるので、毎日仕方なく目を覚ましていた。

今日は布団を捲り上げるだけで済んだから機嫌が良い方なんだろう、痛い思いはもうたくさんだ。

あまりぐずぐずしていると今度はヒステリックな声で喚き散らすので、叶流は嘆息を漏らして制服に着替えた。

悪夢だと良い。そう言い聞かせて毎日を過ごしていた日々。

この家が、大嫌いだ。

部屋の隅で蹲って、何も聞かずに心を閉ざして生きていたい、と何度そう思ったことだろう。

誰一人として自分のことなど気にしない。まるでどこかの家政婦みたいに扱われて、記憶に残っているささやかな「家族」の温もりでさえ、消えてしまった。

母を早くに亡くし、父と祖母とささやかでもひっそりと、温かな幸せに包まれて生きてきた。

それなのに、祖母も自分の前から消えてしまったその時から、叶流は毎日を生きたのが苦痛だった。今までは祖母がいたから頑張れた。頑張ることが出来た。でも、今はその気力さえ起きない。

誰かに救い出してもらいたかったのかもしれない。

だから、あんなリアルな夢を見たんだ。

きつと、そうだ。

あんなに優しい世界が自分に待っているわけがないんだ。

その速度だと、この子が転ぶ。

あら、顔まで真っ赤。可愛いー。ルーちゃん！

おまえは少し、自分に対して優しくすることを覚えた方が良
いな

三人の言葉が流れる。

優しい空気に包まれる。

心があったかくなる。

どっちが夢で、どっちが現実か、揺れる叶流に声がかかる。

それは、誰の声か。

「　　っ！！」

目覚めた先は、今朝と同じ長方形の天蓋。

冷たく暗い自室ではなかった。

叔母の姿もない。

「…夢…？」

上半身を起こして、寝覚めの悪い「現実」が「夢」だったことを知り、ほっと安堵している自分がいた。

こんな夢を見るのはきつと昨夜の会話がきつかけだろう。

自分の闇を思わず晒してしまった。

「……」

だから、また自分は「選択」を行う。

大事な人達を巻き込みたくない。

あんなにお互いを大事にしている優しい人たちを、自分の命を守るということに巻き込みたくない。

「帰る方法とか、”月の乙女”とか、そういうのは後回し。誰かに聞けばいいし、きっと誰かが知ってる」

だから、今は。

そう決心して、叶流はベッドから降りて行動を開始した。

昨夜叶流が寝付くまでいたシリウスの姿はさすがになく、叶流はサイドテーブルにもともと置いてあったメモ用紙に立てかけてあった羽ペンで拙いながらも言伝を書いた。

お世話になりました。いろいろ、ありがとうございます。

叶流

そう謝罪とともに書き記すと、羽ペンを元の場所に戻した。

「これでよし、っと…」

荷物という荷物は持ってない。この”つがい”と共にこの世界に舞い降りた。

だから別に大丈夫。自分は一人でも平気。

それだけ何度も何度も心の中で呟くと叶流はそつと部屋のドアを開けて、昨日フィデスと一緒に城を出た順路を辿っていく。見回りの警備はそこまで頑丈ではなく、門番の兵士が昨日の顔見知りだったこともあって、叶流は適当な嘘を付いて外に出た。

その際、逆に兵士に心配をされてしまい、叶流は本当にこの国の人たちは良い人達ばかりだと思いながら、丁寧に断りを入れた。

まだ明けきらない漆黒の空を見つめ、叶流は街までのそれほど距離のない道を走った。

「まさか、一人で抜け出すとは嬉しい誤算だ……」
突如聞こえた声に叶流が足を止めると、木々の間にあった影が揺れる。

自分の周りを囲むように、がさがたと葉がこすれる音が聞こえると、叶流は身を硬くした。

「……だ、誰……ですか……？」
震える唇から必死に言葉を繰り出し、辺りを見渡す。すると、人の形をした影がのっそりと叶流の前に現れた。

その姿は

「シノンさん……!？」
相手を視認して名前を呼ぶと、彼の纏っている空気に違和感を覚えた。

叶流は見知った人間を前にしても警戒を解くことをせず、もう一度彼の名前を口にする。

「シノン……さん……?」

慎重に呟いた名前は空気に溶け込み、冷たい瞳で叶流を見つめていたシノンがふいに口角を上げる。

邪悪に歪まれた口元、殺意の籠る視線に昨日と同一人物とは思えないほどの威圧感を感じて、叶流は一步後退した。

「……」

明らかに様子がおかしい。

シノンの様子がおかしいと叶流が身構えると、葉擦れの音が大き

くなつて周りから見知った顔ぶれが現れた。

「みなさん…？」

昨日九番館でお世話になったシノンの仲間達だ。

しかし、シノン同様誰一人としてその焦点は合っており、こちらら一度見ただけで「正気」ではないことが伺える。

叶流は騒ぎ立てる心臓の音を煩いぐらい感じてから、深く息を吸い込んだ。

「……」

叶流はシノンを黙って見据えた。彼の放つ独特な威圧感をまともに浴びせられて、正直な身体は脚がぐくぐくと震えている。もちろん怖い。

でも、怖がつていられない。あの日、この世界に来るときに見たユスの背中を思い浮かべて、叶流はほんのわずかな「勇気」を言葉に出した。

「…あなた、誰…？」

ぴくりと、シノンの形の良い眉が動く。

「一体誰なの…？」

感じていた違和感を素直に口に出すが、相手からの返事はなく鋭い眼光だけが送られてくる。

「…あ、あなたが誰だか知りませんが、…ちゃんとシノンさんの許可は得たんですか…？」

叶流からの言葉に、シノンの唇がぴくりと動く。

「許可…？」

「そうです。人の身体をお借りするんだから、ちゃんとその本人に了承を得るのが常識でしょう？」

こんな状況で常識を口にする叶流に「彼」が、面白そうに口元を歪めた。

「お前は…、怖くないのか…？」

「怖いです。凄く、凄く」

「…じゃあ、なぜ、俺が宿っている身体の心配をして、自分の心配

はしない？」

「シノンさんは、こんな私に優しくしてくれました。だから、そんなのは二の次です。その人の身体を傷つけてみなさい…、私は絶対にあなたを許さない」

祖母はいつも言っていた。

「弱い者は強い者がいなければ生きられない。でも、強い者は弱い者がいるからこそ、強くなれる」って。

自分の力はとても弱いけれど、守りたい者があるならば自分を盾にしても守りたい。

ユスの背中を見て、叶流はそう決意していた。

「…バカか…？　そうか、バカなのか」

まるで一人で納得するように呟いた「彼」が、次の瞬間　笑い出した。

唐突に。

大声で。

腹を抱えて。

「…な、なんですか…」

「いいや、おめでたい頭の中だと感心した」

「お、おめでたい…！？」

「そうだろう？　明らかに不利なのはお前の方なのに、…絶対に”俺”を許さないって…？　どう許さないっていうんだ」

ニヤリ、口角を上げた「彼」の不敵な笑みに背筋がゾツとした。思わず自分の両腕を抱く。

せつかく頑張った心臓が悲しいほど小さくなる。もうちょっとぐらい頑張ってくれたって良いじゃないか、と恐怖に負けずに「勇氣」に声を掛けるがその返答は僅かだった。

脚が、竦む。

「……ど、どうって……」

「”月の乙女”はなかなか面白いことを言ってくれる…」

ゆっくりと「彼」が近付いてきて、真っ赤な舌で舌なめずりをす

る姿はまるで肉食獣のようだった。

猛禽類の瞳に射竦められて、叶流の「勇氣」は完全に霧散した。その様子をじつくりと見ていた「彼」は、興が殺がれた、とても言うように叶流の背後に目配せをすると、
叶流は口元を布で覆われた。

「っんう…！！ むーっ！ んっ…、…ん、う…」

両手両足をばたばたと動かしたが、布には薬品がしみこまれているんだろう。

視界が白くなってきた。目の前に立つ「彼」が悦に入るような表情でこちらを見ている。

「さあ…、どう出る？」

最後に聞いた、「彼」の口から発せられた言葉は別の人物だった。

その後、叶流の世界は暗転した。

胸騒ぎがした。

いつもより早く目覚めたシリウスは上半身を起こして前髪を掻き上げる。嘆息を漏らし、ざわざわと騒ぐ心を静めるように胸元のシヤツを掴んだ。

それでも鳴り止むことのないざわめきに苛立ちを露にすると、舌打ちをしてベッドから起き上がった。

「…なんだこれは」

いつものように寝巻きを脱ぎ捨て、クロークから黒スーツ一式を取り出して手早く準備を済ませる。

朝焼けが窓から差し込むのと同時にシリウスは自室を出て皮手袋をはめ込んだ。

両手に皮手袋をはめながら広い廊下を歩いていると、すぐに叶流にあてた部屋が見えてくる、扉の前には見知った二人の姿。

「どうした？ 何かあったか？」

足早に二人の傍まで寄ると、ばつが悪そうに二人揃って視線を落とす。

シリウスはそんなテアとフィデスに微笑を漏らす。

「…フィデス、おまえは落ち着いたのか？」

「すっかり。…ご迷惑おかけしました」

神妙な顔をして、ぺこりと頭を下げるフィデスを見て、シリウスは「気にするな」と呟き、言葉を続けた。

「まあ、お前の言いたいことも解るさ。そう気を落とすな」

「…うん」

「それに昨夜は寝付くまで、俺が傍にいた」
様子は？

と、シリウスの言葉を聞いて問いかける二人の視線に、シリウスは呆れるように昨夜の叶流の様子を口にした。

「気にしてない、と言ったら嘘になるな。…あいつも頭が悪いわけじゃない。ちゃんとお前達のこと解ってる。大丈夫だ」

二人は顔を見合わせて少し安心したような顔つきになった。

「だが、すまん。二人のことを少し話してしまった」

シリウスも、昨夜フォローをするつもりでフィデスとテアの過去を話していたことに対して頭を下げた。

「…構わない。フォロー、ありがとう。シリウス」

「同じく、私も。ありがとう、スー」

頭を上げて見た二人は、シリウスの大好きないつもの彼等に戻っていた。

シリウスは、こほん、と一つ咳払いをすると叶流の部屋のドアノブに手を掛けノックを数回し、フィデスが叶流の名前を呼ぶ。

しかし、中からの返答はない。

まだ寝ている可能性もあるだろう、と本来ならば踵を返していた

が胸騒ぎは収まらない。

シリウスは「入るぞ」と一応断りを入れてドアを開けた。

「……っ」

目に入ったベッドは遠目から見ても空っぽ。

テアとフィデスがシリウスの傍を駆け抜け、ベッドに近寄った。

フィデスがベッドの温もりを確認している間にテアがサイドテーブルに置いてあったメモに気付いた。

二人の傍に近寄るシリウスに各々報告を告げる。

「ベッドが冷たい。だいぶ前に出た可能性が高いわ」

「シリウス、これが置いてあった」

シリウスはテアから受け取ったメモを見つめる。

「……読めん」

嘆息を零すとテアとフィデスが明らかに落胆したのがわかった。

残念なことに「あちら」の世界で通常使用されている文字で書かれているため、どうしても読むことが出来なかった。

「城外に出たのであれば門兵が彼女の姿を見てるだろう。すぐに門兵に話を」

「シリウス……!!」

シリウスの言葉の途中、テアの声と同時に叶流の部屋の窓ガラスが割れた。

突如聞こえたガラス音に身構えると、フィデスがシリウスを庇うように抱きしめ、テアがシリウスの前に立つ。それ以上の攻撃という攻撃がなく、窓ガラスが割れただけだった。

「……何か、投げ込まれた」

先にテアが動いて、投げ込まれたものを注意深く見つめた。

腰から剣を抜き剣先で危険があるか確認をしたのち、剣を収めたテアが投げ込まれたものを拾い上げる。

「原始的な方法だな」

ため息をつきながら、石を包んでいたしわくちゃになった紙をシリウスに手渡した。はらり、と落ちる「何か」。

そこに注意を向けるわけにもいかないので、シリウスは渡された紙とそこにいくつか残っている毛髪に目を見張る。

暫く紙に書かれた文字に視線を走らせたシリウスは、胸騒ぎの原因を手元の紙で知る。

「…あの、バカ…っ」

紙がぐしゃりと悲鳴を上げる。

シリウスは心配そうに顔色を伺ってきた二人に握りつぶした紙を渡すと、不機嫌に両腕を組んだ。

「…なによ、これ…」

「宣戦布告か…」

「ご丁寧にあいつの髪の手つきだな」

「お、お、女の子の髪の手を切るなんて…！！挑発とは思えない…！」

「落ち着け」

シリウスはフィデスにそう言いつつも自分への苛立ちで自分の指を噛んだ。

自分がついていながら起きてしまった不測の事態が、二度続けて起こった。

「やはり朝までついているべきだったか…」

今更そう言っても起こってしまったことはしょうがない。

冷静さを取り戻すために頭を振ると、シリウスは指示を待っているテアとフィデスの顔をしっかりと見つめた。

「……狙いは俺だ」

「シリウス」

「大丈夫だ。もちろん、二人にもついてきてもらう。ただし、実際に指定された場所に行くのは俺一人だ。いいな」

「しかし…！」

「言われた通りにするんだ。…今はそうするしかない」

悔しそうに顔を歪めたテアの肩にシリウスが手を置くと、フィデスを見つめる。

「行くぞ」

シリウスの言葉に二人は即座に地を蹴った。

ひらりひらりと舞い落ちたぐしゃぐしゃの紙には、

『 ”月の乙女” は九番館にて丁重にお預かりしている』

という本文と共に、文末がこう締めくくられていた。

『 亡国の皇子一人で来い』

「あの」

「なんだ」

「早くその身体をシノンさんに返してください」

『彼』は叶流を見下ろしながら怪訝な顔をした。それもそうだ。

叶流は両手を後ろで縛られ、土管の上に座っている『彼』を見上げていたのだから。

まるで自分の状況を把握できてない叶流からの言葉に、思わず笑みが零れたのは『彼』だ。

「……お前は、自分の状況が分かってないのか？ 馬鹿なのか？
どっちだ」

「ば、ばか……！？」

「だってそうだろう？ なんだってこんな状況で俺にそんな口をきける？」

『彼』からの問いに、叶流ははた、と気付く。

目を覚ました場所は一度来たことのある場所。シノンと一緒に芝居をしたあの倉庫内だった。そして、鎖で縛られた両手。辺りは正気を失ったシノンの仲間達。

「……ああ、確かに」

「だから、お前は馬鹿なのか？」

そう言われてもしようがないような気がして、叶流は『彼』から視線を逸らして俯いた。

だって、助けて欲しいと願う相手なんていない。

その場所、その人たちには、自分から別れを告げてきたばかりだから、自分で出来る限りの情報を得て、逃げる隙を見つけない。

「あの」

「今度はなんだ」

「……“月の乙女”ってなんですか？」

「……お前のことだが……？」

「いえ、私には叶流っていう名前があります」

『彼』は、叶流の言葉を聞いて目を見開いた。

「……カナル？」

「？　そうですけど」

また、だ。

自分の名前を告げるだけで反応を示されたのは、これで二度目。
この世界に「カナル」という言葉があるんだろうか？

叶流は『彼』の反応を食い入るように見つめた。

「……」

動揺を示したのは一瞬だけだ。それから、土管に右足を掛けて抱え込む。

「ルナリアの皇子には会ったのか？」

「……るなりあ……？」

「この国の名だ。ルナリアのライジェル皇子は随分と博識だと伺ってる。そいつに聞けばなんでも分かるだろ」

「……そうなんですか？」

「ああ。なんでもこの世界の秘密を暴くことが趣味らしい。考古学にも興味を持っていると聞いたことがある」

「そうなんですか……」

「会わなかったのか？」

「はい」

「……お前は、ルナリアの王城にいてなにをしてたんだ……？」

「え、あの、そのライジェル皇子って人が戻ってくるまで待つようについて言われて」

「それで何も聞かされてないのか？」

「はい」

叶流の素直な返事に深いため息をついた『彼』は、独り言のように呟いた。

「お前は本当になにも知らないんだな」

「え？」

「なんでもない。そろそろお迎えがくるから黙ってる」

『彼』からの言葉を受け、質問を重ねようとした叶流は突如響いた爆音に『彼』から意識が逸れた。

「っ！？」

緊迫した空気と吹き上がる熱風に一瞬瞳を閉じる。そして、瞳を開けた叶流の瞳にはシリウスの姿。吹き飛ばされた鉄製の扉の奥で、不機嫌な表情で立っていた。

「…シリウスさん…ッ！？」

まさか来ると思ってなかった叶流は、驚きに声をあげる。

「さん、は余計だ。何度言ったら分かる」

はぁ、とまるで面倒くさいと言うようにため息をもらすシリウスに、叶流は驚きを隠せなかった。

どうしてこんなところに彼がいるんだろう？

「今、外してやる」

気付くと、真後ろで叶流を見張っていた男が鎖を解いている。逃がしてくれるというのだろうか？

「逃げたら、殺す」

殺気の含まれた声に背筋が凍ると、叶流は大人しく男の言葉に従った。鎖が解かれている間、もう一度シリウスの方を見つめる。彼は、叶流の方をちらりと見やり、無事な姿を視認するとその隣に視線を向けた。彼の紫の瞳には、明らかに「怒り」の色が見える。

「その娘から離れろ」

叶流は、シリウスの視線の先を見てぎよっとする。『彼』が嬉しそうに自分にナイフを向けていたからだ。確実に投擲内に捕捉されている。下手なことをしたら命はないだろう、そう思った叶流は、真後ろで鎖が外れる音を聞きながら大人しくすることに決めた。

「…これはこれは、お待ちしてました」

『彼』からの一言を聞いて、シリウスの顔が一層険しくなる。

きつと『彼』から放つ違和感を感じ取ったんだろう。

「…お前、昨日のオカマじゃないな…？」

「この女と同じことをあなたも言うのですか…」

鎖が外れた叶流の片腕を強引に持ち上げると、自分の口から小さな悲鳴が上がる。

その様子を見ていたシリウスの眉根がぴくり、と動いた。今にも『彼』を殺しそうなほど殺気だっている。

「なにが目的だ。…アンティークレイアの者」

「ほお。そこまでわかりで？」

「こつ何度もちよつかい出されれば嫌でもわかる」

「…なるほど。では日を改めてからの方が良かったですね」

「いいから要件を言え」

シリウスが苛立つ様子に、『彼』はとても嬉しそうにナイフを片手でくるくる回しながら手元で弄んでいた。

「ええ。なぜ、何度も謁見が断られているのか不思議でして…」

「当然だ。お前達が何を企んでいるのか、俺が知らないとも思ってたか」

鋭い眼光を『彼』に向けるシリウスに、『彼』は薄ら笑いを浮かべた。

「…我らが、なに、を、企んでいると…？」

ゆつくりと形作られた言葉は、まるでシリウスの様子を伺い楽しむように紡がれた。

何か含みのあるような言い方に、聞いている叶流でさえも背筋がゾツとする。

「具体的なことは知らん。しかし、…その女で何かをしようとしているのは俺でもわかる」

「…それはまた鋭い…」

「そりやどうも」

「でしたら話が早い。このまま”月の乙女”を我らがアンティークレイア総統にお捧げください」

「ただの女でよければ構わない」

「……」

「その女に、お前らが欲しい特別な力など持っていない」

「……おかしいですねえ。私の方にあがってきた報告によると、
“言霊”が扱える、と聞いてますが？」

「そうだな、それは俺も見た。本当のことだ」

「でしたら」

「彼女のためにそう何度も言いたくはないが、その女は乙女ではない」

「……」

「俺が純潔を奪った」

「……妃にでもする気ですか？」

「何を言っているのかまったく理解ができません」

「国を復興するなら妃を娶り、散らばった国民を集めるだけ。……

もしよろしければ、お手伝いいたしましょうか……？」

にやり、と笑んだ『彼』の言葉に何か嫌なものが込められている
気がした。その瞬間、シリウスの纏っている空気の温度が低くなる。

「今すぐこの場で俺にぶち殺されたいか」

今まで聞いたことのない低い声に、背筋がぞつとした。

シリウスの瞳に宿った怒りが沸騰しそうなほど高まっているのが
わかる。

「できるものならやってみるといい……。お気づきのとおり、この身
体は可哀想な一般市民のもの……。皇子様にそれが出来ますか……？」

『彼』はまるでシリウスを試すように言々と、指を鳴らした。

すると、音楽室で叶流とユスを襲った生物が、山積みになってい
る木箱の間から一斉に姿を現す。あつという間にシリウスを囲んだ
獣人たちからは、荒い吐息と共に殺意が体から這い出ていた。食事
を与えてなかったのか、目が血走って狂喜を放っている者もいる。

叶流は見ているだけなのに、恐怖で足が震えた。

「さあ、遠慮はいりません。好きなだけ斬りなさい」

『彼』は勝ち誇るようにシリウスに視線を投げている。シリウスは苦悶の表情を浮かべながら、腰に下げている長剣に手を掛けると、鞘を抜いて上段で構えた。

そして、神経を切っ先に集中して大きく深呼吸。

「はああああっ！！！」

気合を入れたシリウスの刃は次々と獣人を捉えていく。長剣を振るうごとに血しぶきが飛ぶが、その色は鮮血だった。

倒れていく獣人を見つめながら、叶流は悲しみで心がいつぱいになる。生きているのに、こうして死ぬために生まれてきたわけじゃないのに。

みんな、何かしら『使命』を持って生まれてきているはずなのに。両手で顔を覆う。何が敵で、何が味方なの？

倒れていく獣人たちを眺めていた『彼』は、まるで次に始まるゲームを楽しむようにある手段に出た。

「きやあっ！？」

顔を覆っていた両手のうち、片腕を無理やり掴むと自分の方へ叶流を引き寄せた。叶流は思わず態勢を崩して転びそうになったが、柔らかな毛に助けられる。

気付くと、背後から獣人に抱きしめられる形で喉元に鋭い爪の切っ先が当たっていた。

思わずごくり、と喉が鳴る。

爪の切っ先が当たった場所から、つつ、と真紅の生暖かい液体が流れた。

「さあ、次はどうですか？」

邪悪に歪んだ笑みが、殺しを何とも思わない殺人者と重なった。

叶流は込みあがる自分の『恐怖』に、体の動きを封じられる。

それが、まるであの時と同じだった。

ユスが身を呈して自分を獣人から庇ってくれた、あの時と。

「待て、そいつは関係ない！」

「それは貴方が決めることじゃない。それに、この女だけいれば封

印くらいは解けるはずだ」

「……おまえ、ら……、まさか……！！」

「勝利の歌声は、我らの国に」

につこり微笑んだ『彼』が、獣人たちに目配せをする。それを合図に、まだ立ち上がっている獣人たちがシリウスに近付いていく。

シリウスは長剣の柄を握り締めている手に一瞬力を入れたが、叶流の喉元にあてられていている爪を見つめてそっとその手を離れた。

がちゃん、とシリウスの手から離れた長剣が床に落ちると、獣人たちは一斉に鋭い爪を出して大きく腕を振り上げた。

「やめて……っ！！！！！！」

叶流が声を張り上げたが、それが通じるわけもなく獣人たちは腕を振り下ろした。

無防備な身体を曝け出したシリウスに向かって、いくつもの爪が振り下ろされていく。先ほどまでは獣人たちの鮮血が飛び散っていたのに、今ではシリウスの血があたりを染めている。

刻まれるスーッ、覗いた肌はぱくりと割れ、血が滴っていた。それなのにシリウスはじっと叶流を見つめたまま、時折加えられる攻撃に苦悶の表情を浮かべながらも、大丈夫だと言うように瞳を細めた。

いやだ。こんなこと、いやだ。

「もうやめてっっ！！！！　お願い！！！！」

しかし、隣にいる『彼』は止める指示を出さない。大声を出している叶流のことすら眼中にないようだった。

その様子に、『彼』はシリウスが死ぬまでやらせるつもりだということがわかる。

「やめて、やめさせてくださいっ！！」

「うるさい」

低く、静かに殺気の籠もった声で叶流に冷たい視線を浴びせた『

彼』。直後、硬直する正直な自分の身体。

純粋な殺気にどうすることもできない非力な自分が悔しくて、奥歯を噛み締める。

自分に出来ることは何か。

このままではシリウスが危険だ。彼は、自分に優しくしてくれた人だ。初めて孤独に震えていた自分を抱きしめてくれた。

なんの力もないくせに、それでも『力が欲しい』と願うのはいけないことだろうか？

自分のせいで傷を負っている人を目の前にして『力が欲しい』と泣くのは弱虫なのか？

流れていく涙は、悔しさを含んでいる。

力が欲しい。

大きな力はいりません。私が好きになった人たちを護るような、そんな『ちつぽけな力』が欲しい……！！

涙で滲んでいくシリウスの瞳を見つめながら、叶流は強く願った。その時。

「！？」

胸元に忍ばせていた“つがい”が、叶流の涙を吸収して光を放った。

“つがい”から放たれる光は、叶流を中心に包み込む。柔らかなクリーム色の光に包まれて、ふわりと身体が浮いた。獣人の爪はいつの間にか離れており、命の危機はなくなる。が、新たな状況に叶流は目を白黒させた。

「……なに、これ……」

制服に隠れるように下げていた“つがい”が、服の中からふわりと浮かぶ。

叶流は祖母の形見である“つがい”を見つめて、指で触れた。

刹那。

脳裏に溢れる言葉達。

たくさん言葉が氾濫し、交差して、そうして「言葉の羅列」が完成される。それはまるで宇宙の塵を巻き込んで星が生まれるように、その『言葉』は生まれた。

いや、違う。

唄、だ。

『焦がれているの

いつか巡り会える時を祈って

私は歌う

貴方のために歌い続ける

籠の鳥のように

歌を貴方に捧げる

すべてを貴方に

すべてを星に 捧げます』

祖母の、故郷の唄。

倉庫内に響き渡る自分の歌声は、自分のものじゃないように感じた。高く澄んで、それでいて聞いている人をとても穏やかな気分にさせる。

「やはり……、やはりそういうことかあ……っ！……！」

嬉しそうに声を上げたのは、『彼』だ。すぐ傍で叶流を見ながら

にたり、といやな笑いを浮かべている。

「最後のセレクトキーは、やはり月に隠されていたんだな」

『彼』が怖い空気を纏って叶流に手を伸ばしてくる。叶流は咄嗟に祖母の形見である“つがい”を両手で抱きしめて引き寄せた。

「それは、渡せ」

「いやです」

「お前が持つべきものではない、これは巫女のものだ」

「そんなの知りません！ これは、……これは、私のおばあちゃんの形見だから死んでも渡さない……！！」

シリウスを傷つけ、シノンの身体を好き勝手使い、人を殺めることをゲームだと思うような人間になんか、絶対に渡したくない。

叶流は大好きな祖母の想いが込められた“つがい”を抱きしめる手に力をこめた。

「じゃあ、死ね」

冷たい一言と、背筋が凍る殺気に叶流の身体がびくりと跳ねる。

『恐怖』に飲み込まれそうになる自分を叱咤しようとするが、もう既に心が疲弊して限界だった。“つがい”を握り締める手が震える。

「殺すなら、俺を殺せ……！！ その女は、関係ない！！」

シリウスの声が聞こえた。

叶流が入り口にいるシリウスの方に顔を向けると、そこにはテアとフィデスに両脇を抱えられたシリウスが傷だらけの状態で立っていた。囲んでいた獣人たちは全員床に伏せられている。

「シリウスさん……っ！」

名前を呼んで、テアとフィデスの顔を見つめる。テアもフィデスも視線だけは優しく叶流を見つめていた。

戦闘中なので緊張感だけは纏ったまま、テアは片手に剣を握り、フィデスも短銃を構えていた。

「……あなたに死なれたら困るんですよ、亡国の皇子殿」

狂喜に滲んだ瞳を見つめながら、叶流は『彼』の様子を伺った。

「それに、この女を憎むのは貴方の方じゃないですか……？」

『彼』からの言葉に、シリウスの瞳がかすかに揺れ動いたのが分かる。

「あなたの国が滅びるきっかけを作ったのは」

「黙れ！！！！！」

『彼』の言葉を遮るようにシリウスの怒声が倉庫内に響く。

叶流は驚いたシリウスの表情を見つめ、シリウスは叶流の視線から逸らすように『彼』を見つめた。

「それ以上言ったら……」

シリウスの反応が楽しかったのか、『彼』は不敵に口元を歪めると楽しそうに叶流を見上げた。

「今回はこのあたりで失礼する。……亡国の皇子と、お前の様子を見に來ただけだからな」

『彼』は戦いを娯樂として軽んじているらしく、その顔が「楽しかった」と語っていた。そして、シリウスたちに向き直ると声を高らかにして口を開いた。

「私は、“オルガ”。アンティクレイア帝国暗部所属“オルガ”です。以後、お見知りおきを」

そしてオルガと名乗る者は、シノンの身体から出て行った。

どさり、と倒れたシノンとその仲間たちは意識を失っていた。眠っているような表情にほつと安堵の息を漏らす叶流は、自分に迫り来る『何か』を感じ取って震える身体を抱きしめた。

【 9 】

「おい」

声をかけられた叶流は、一瞬きよとした顔で声のするほうに顔を向けた。

「怪我、ないか？」

怪我だらけのシリウスがテアとフィデスに両脇を抱えられて歩いてくる。その様子を見て、叶流は即座にシリウスの名を呼ぼうとしたのだが。

『あ』

その場にいた全員の声が重なる。

ぱちん、とまるでシャボン玉が弾けるような音が聞こえたと思ったら、 叶流の視界がぐんと下がった。

「う、っきゃああああああっ！」

一瞬、シリウスが助けようとしているのが見えたので、咄嗟にスカートの裾が広がらないように手で押さえる。しかし、その間にコンクリートの硬い地面は叶流に迫っていた。ぶつかると、叶流は次にくる衝撃を覚悟するように、ぎゅっと瞳を閉じた。

が、痛くない。衝撃の代わりに聞こえたのは、聞き覚えのない低い声。

「ナイスキャッチ……！」

叶流が驚いて顔をあげると、金髪の奥にある藍色の瞳とかち合った。驚きに染めた瞳を叶流に向け、金髪の男はすぐ慣れたように笑みを浮かべる。

「大丈夫ですか？ お嬢さん」

「は、はい」

「それはよかった」

につこり微笑む男性を見て呆氣に取られていると、頭上から声が降ってくる。

「……おまえ、どうしてここにいる」

冷やかな声の主はもちろんシリウスだ。叶流を抱きとめる男に向かつて、不機嫌をあらわにしている。それに対して男は終始笑顔だ。

「いやー、いいところで旦那帰ってきちゃったもんだからバルコニーに追い出されたんだけど、一向に中に入れてもらえる気配がなくて、しょうがないから自力で降りて帰宅してたんだ。そうしたら、早朝からなにやら騒がしいだろ？ しかも、場所が9番館。ゴロツキがまた悪さでもしたら面倒だなんて思ったから、城に連絡つけて、ここに駆けつけたってわけ」

「……見てたのか？」

「ああ、最後のほうだけな」

笑顔で返答した男を見るシリウスの瞳には、怒りが込められている。その視線を受けている男以外の全員が、シリウスが怒っているだろうことを理解していた。それなのに、男は叶流の両手を握りこみ、熱っぽい眼差しを向けてきた。

「こんつなにかわいらしいお嬢さんに傷がつくのは、耐えられない。俺が下敷きになって本当に良かった。ここで会ったのも何かのご縁。ぜひお名前を聞かせてくださいませんか？」

今までの会話の内容で、敵ではなくてどちらかというところ「こちら側」であると思われる男に、叶流は恐るおそる名前を告げる。

「……か、叶流です……。天川叶流」

「カナル……？」

ああ、やはり。

この男も叶流の名前を聞いて、なにかしらの反応を見せる。けれど、その反応は一瞬のうちに消えて、満面の笑みに変わった。

「では、あなたが……！！ ああ、シリウスから話は聞いています」
何がどうなっているのか理解ができない叶流は、思わずシリウス

に助けを求めるように視線を投げた。シリウスもまた困ったような呆れたような表情をして、口を開いた。

「この軽薄そうな男が、ライジェル・ルナリア。この国の王子で、王位継承者だ」

ため息と共に吐き出された言葉に、叶流は驚きを隠せない。

長い金系の髪をポニーテールで1本に縛り、藍色の瞳は好奇心で溢れている。端正な顔は甘く、年上の女性に好かれそうなタイプだなによりも、声が、甘い。

「シリウス、軽薄そうな、はよけいだ」

「本当のことしか俺は言わない」

「本当のことを黙っていることも必要なことだ」

表情を硬くするシリウスに対し、ライジェルはとても楽しそうに答える。そのどうでもいいやりとりがしばらく続いたので、見かねたテアの一言が、ふたりの口を閉じさせた。

「ライジェルさま、これ以上はシリウスの傷に障ります」

その一言で叶流を含めた傍観者全員がシリウスの傷口を見る。かすり傷だとはいえ、かなりざっくりやられていたはずだ。止血された傷口からは新しい血が滲んでおり、早急に手当てをしたほうがいいと誰もが思った。叶流はライジェルの上から降りて、シリウスの前に立つ。

「シリウスさん……！」

忘れていたわけではないが、改めてシリウスの傷口を見るとその痛々しさに叶流の顔も歪んだ。

「あの、みなさんごめんなさい！」

頭を下げて、いろいろな意味で謝罪の言葉を口にする。そもそも叶流が城を黙って出なければ、シリウスはこんな怪我をせずにすんだのだ。シリウスを大事に想っているふたりに、心配そうな顔をさせずにすんだ。これは、全部自分の責任。そう思うと、叶流の心は悲鳴をあげるように痛んだ。

「顔をあげる」

シリウスの変わらぬ声のトーンで、叶流は泣きそうな気持ちをぐつとこらえて言われたとおりに顔をあげる。視界が涙で歪まないように、必死で握る拳に力を入れてシリウスを見上げた。彼は、口元を緩ませてふつと微笑む。

「説教はあとだ。せつかく待ち人が現れたんだ、おまえはおまえのことをしろ」

目の前の彼から頭に手を乗せられて、叶流の心にあたかな気持ちが広がった。昨夜のこともあるて見るのが怖かったけれど、両脇にいるテアとフィデスも、シリウスと同じように微笑んでいる。

「俺のいない間に、ずいぶん仲良しになったもんだな」

背後から聞こえたライジエルの声で叶流が振り向くと、彼はその場に立っていた。そういえば、助けてもらったお礼を言っていない。「あの、ライジエル……さま。さっきは受け止めてくださって、ありがとうございました！」

「ライジエルで構いませんよ。そんなことよりも、シリウスの治療もあるから城に話の場を移そっか」

自然と叶流の両手を握り締めて、ライジエルはにっこりと笑う。

この軟派な対応に、叶流は少しばかり驚いていた。

「あ、あの、でもひとつだけいいですか？」

「ん？ なにかな」

「あなたは、私にとって敵ですか？ 味方ですか？」

叶流の言葉に息を呑んだのは、テアとフィデスとシリウスだ。

「ルーちゃん、あの……！」

「フィデスさんたちのことは、信用してます。でも、私は私の目でちゃんと相手を確認したいんです。大事な話をこの人から聞くのなら、なおさら」

ライジエルの楽しそうな光を宿した瞳を見つめながら、叶流は「信用に値できるかどうか」を考えていた。それでもその外見からうかがえる様子と中身は違うだろう。だから叶流は、両手を広げた。「ライジエルさん、じつとしてくださいね」

「ん？」

そして、3人に初めて出会ったときのように抱きしめるべく歩き出した。その直後、叶流の頭をぐわしつと掴む手、背後から抱きしめるように腹部に回された腕、左腕を縫るように抱きしめる柔らかな身体を、叶流は同時に感じた。

「ひゃあっ!？」

「ルーちゃんだめ、自分の身体を大事にして!!」

「それはするな」

左からはフィデスの必死な声、右上からはテアの焦った声、そして耳元で聞こえたのは。

「それだけはやめろ」

淡々としながらも、ぎゅうつと背後から抱きしめてくるシリウスの声だった。3人に全力で止められた叶流は、目の前で何をされるのかわかったライジェルが両手を広げて待っている姿を見る。とても、嬉しそうだ。

「……あれ、こないの？」

叶流は考えた。3人一緒に自分の行動を止める、ということはきつと問題があるということ。叶流は3人を信じている。その3人がここまで必死になっているので、やはり言うとおりにするべきだと思った。ライジェルに比べると、3人のほうが信頼性は高い。

「はい」

ぴくり、腹部に回された腕が小さく動く。叶流はその腕に自分の手を重ねて、ライジェルを見つめる。

「私、ライジェルさんよりも、みなさんのほうが好きですから、そちらに行きません」

「え、自分から仕掛けてきたのに、そんな理由でやめちゃうの？」

「立派な理由だと思います」

「ふうん。じゃあ、俺を好きになったら俺の言うことも聞いてくれるわけ？」

「そうですね。そのときの信頼関係によります」

背後から聞こえたのは、ほっとひと息ついたふたりの「よかった」という声。そして、ぎゅうっと抱きしめてきたシリウスの腕だった。

* * * *

「俺のことは気にするな。ライジエルの話を聞いてやってくれ」

ある程度の手当てが終わったシリウスは、心配そうに様子を見ている叶流に言った。

9番館から場所を移した現在、シリウスの自室に全員はいる。ベッドに寝かせられたシリウスはフィデスからの丁寧な手当てを受け、痛み止めの薬も飲んで多少落ち着いていた。叶流は、近くのテーブルでティータイムを楽しんでいるライジエルを見た。ライジエルはカップをソーサーに置き、伸びをひとつして立ち上がる。ベッドの周りで立っているテア、フィデス、椅子に座っている叶流を順に見回してから、シリウスのベッドに腰掛けた。

「さて、どこから話したらいいのやら」

少しおどけた様子で肩をすくめたライジエルに、シリウスが鋭い視線を送る。

「だってしょーがないだろー？　どこから話したほうがいいのかなんて、俺にはさっぱりわからないんだからさー」

「まずいと思ったら俺が止める。心配するな」

それは、叶流に聞かせなくてもいい話もある、ということだ。叶流はふたりのやりとりを注意深く見ながら、話を待った。

「じゃあ、順を追って説明をしよう」

ふたりの中で何かがまとまったのか、ライジエルは叶流に言った。

「ふたつの塔にシリウスたちを向かわせたのは、俺なんだ」

「あなたが……？」

「そ。このフォーリアっていう世界には、王族のみが知っている伝

承があるのさ」

「伝承……」

「口伝のため、特別文字に書き起こしているものではないんだけど、簡単に言えば“ふたつの月が交わるときに、ふたつの塔に異世界の扉が開かれる”って内容。フォーリアに浮かぶふたつの月は、お互い別の軌道を辿りながら周っているんだけど、その月がキレイに重なる日が必ずある。それも、1年に1回」

にっこり微笑んだライジエルが、人差し指を立てて叶流に見せる。その瞳は、興味を持った子どものように輝いていた。彼の様子と、話の内容から「答え」が浮かぶ。

「あ、もしかして……」

「そうだ。俺たちが初めて会った日の前日が、その日“月交わりの日”だった」

叶流の考えを次いだように、シリウスが静かに口を開く。ライジエルは、立てた指をゆっくりと叶流へ向けた。

「そしてその日に、君はココへやってきた。ユスの予言どおりに」

「あのおばあさんを知ってるんですか!？」

「もちろん。彼女は、あのふたつの塔の前代の巫女、……いや、後継者が現れてないからまだ現役巫女、か」

「あれ、でもテアさんは、あの塔には後継者が今いるって……」

「正式な後継者じゃない。ユスもさすがに歳だからねー、老体に鞭打つてずっとあそこに幽閉されているのもしんどいでしょ？」

「ライジエル」

シリウスが叱責するように名前を呼んだ。幽閉、というあまり穏やかじゃない言葉に、叶流は目を丸くする。

「幽閉って……、じゃあ今あの塔にいる人も幽閉されているんですか……？」

「正式な後継者じゃないから、それはないよ。俺も、可憐な少女たちがあんなかび臭いところで一生を終えるのは忍びないからね。何人かで交代しながら祈りを捧げているよ、心配しないで」

につこりと微笑まれても、しつくりこない。ライジエルの“巫女”に対する考えは、あの塔に幽閉されるのは当然だと思っているよ。うなので、この世界における“巫女”の役割はもしかしたらとても重いものなのかもしれない。人としての生活を求めることができないのが当然なぐらい重要で、大切な役割が。

「……あの、“巫女”ってなんですか？」

「この世界における、大切な存在、だよ」

「それなのに幽閉するんですか？」

「それが彼女達の仕事だからね」

「仕事？ 幽閉されて、祈りを捧げるのが仕事だっていうんですか？」

「そうだね。そうやって、巫女は代替わりを続けてきた。この世界のために祈りと歌を捧げる。ふたつの塔から奏でられる巫女の音色は世界を調律している、って言われているよ。……でも、ここ数十年、その音色を聞いたことは一度としてないけどね」

「一度もない？」

「調律できるのは正式な巫女のみ。そして巫女はふたり揃わなければ調律の均衡を崩してしまう」

シリウスが、淡々と喋る。その声に、ライジエルが肩をすくめた。

「均衡を先に崩したのは、巫女のほうだから始末が悪い」

「巫女が……？」

「ユスの代に、もうひとつの塔にいた巫女が消えた。それを境にして、世界は調律されずに少しずつ狂っていった。生態系の異常、凶暴的な獣人が多く発生し始めたのも、ここ最近の出来事だ」

「巫女がいなくなって調律ができなくなった。調律ができなくなった世界はひとりの巫女でどうにか保とうとしていた。しかし、少しずつ狂い始めた世界は、それを補うように異形の者を生み出した。

……ま、一般的に考えればそういうことなんだろうね」

うんうん、と頷きながらライジエルが他人事のように言う。自分の国や、自分の住んでいる世界のことなのに、どうしてここまで客

観的にみられるんだろうか、と叶流は不思議に思った。

「他人事すぎるって、目で見てる」

ライジェルが叶流に向かってにつこりと微笑んだ。叶流は慌てて取り繕おうとしたが、そこまで見抜いたライジェルに少しばかり驚いた。見抜かれた叶流は取り繕おうとした言葉を飲み込んで、真剣にライジェルの藍色の瞳を見る。

「はい。どうして……、自分の国や世界のことなのにそんなに冷静でいられるんですか……？」

ライジェルは少しだけ眉根を寄せて、シリウスを見た。

「もともと、あのふたつの塔を管理していたのは、俺の国じゃないからね」

「え……？」

「あのふたつの塔の管理と巫女の育成をしていたのは、アルカディアという小さな国だ。今は、アンティクレイアに滅ぼされてただの瓦礫の山になっているがな」

シリウスの言葉に、テアとフィデスも顔を曇らせた。ライジェルは表情には出さないが、これ以上話すような雰囲気ではない。叶流もこの空気を読んで、黙っていた。知りたいこと、聞きたいこと、そして自分が考えている「自分」のこと、今の話をまとめたらきつと答えが出る。わかっていても、今はシリウスの憂い顔をどうにかしてやりたかった。

「……おまえがそんな顔をするな」

ふとシリウスの紫の瞳に見つめられて、叶流は驚く。彼は叶流の頬にその大きな手を当て、大丈夫だというように微笑んだ。その表情に、氣遣われてしまったことに気づいた叶流は、微笑みを返す。

「それもこれも、あの巫女が消えたのがきつかけだ。憎むべきは、……いや、よそう。憎んだところでどうにかなるようなものじゃない……」

「そうだな。それに、しみりしてもしょうがないんだから、君の処遇を考えよつか。現実的に考えて、そっちのほうが建設的な気が

するな」

ライジエルの軽い声が部屋に響くと、触れていたシリウスのぬくもりが消え、視線が叶流に集められる。

今までの話を聞いたなかで、叶流ははつきりとした「答え」を見つけてしまった。

ユスが初めて会ったときの言葉、祖母から託されたつがい、そして数十年前に消えた巫女、ひとつひとつのパーツが1本の線になる。それは、もしかしたら叶流が消えた巫女の孫かもしれない、という可能性だ。

シリウスの顔を見ると、そんなことは言えない。もしかしたら自分の祖母が、何かの「きっかけ」を作ってしまった張本人なのかもしれないからだ。まだ、憶測で言っではいけない。そんな気がした。「……君は、何ができる？」

どうしてこの世界に呼び寄せられたのかはわからない。その理由を、これから見つけなければならぬような気がしていた。そのためには、ここにおいてももう理由がある。きっと、ライジエルはそれを知りたいんだと思った。だって、その目は何かを測るように叶流を見ていたのだから。

「何ができるのか、考えさせてください」

「月の乙女として働いても全然いいんだよ？」

につこり微笑むライジエルに見つめられて、背筋が少し寒くなった。

「アンティクレイアに狙われているってことは、君にはまだ秘密が隠れていそうだしね」

今、叶流に隠されている秘密でわかるのは、祖母から譲り受けた「つがい」のことだろう。ぎゅっと、制服越しにつがいを握り締める。

「例えば、誰かから譲り受けたものを持っていたり」

呼吸が、止まる。ライジエルが怖い。

叶流は今までの話を聞きながら、消えた巫女の孫が自分かもしれ

ない、という答えに達したが、もしかしたらライジェルはそれすらも見透かしているのかもしれない、と感じていた。早くなる鼓動、動揺が表に出ないことを祈りながら叶流はライジェルの瞳を見返した。

「なんてね」

読めないような笑顔を見せたライジェルは、おどけるように両手を上げる。

「さしてここですぐ決まるようなもんじゃないから、君の処遇はおいおい考えることにするよ。俺も今日はちょっとハードだったから、休んでくるー」

「その前に、たまったご公務をお願いします、ライジェルさま」

「テア、俺の休むぞ気合に水をささないでくれるかな？」

「無理です。タビトが泣きます」

「はつきり言うねー、テアも」

苦笑したライジェルはベッドから立ち上がってテアへの返事のもりか、片手をひらひら上げてシリウスの部屋から出て行った。その後ろ姿を見ながら、叶流はつがいを握り締める手に力をこめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4570t/>

Omit

2011年10月9日03時11分発行